田辺の模擬原爆証言集

平成十四年七月二六日第２版

一　はじめに

太平洋戦争終了直前の一九四五年七月二六日午前九時二六分、単機来襲したB29爆撃機が当時の大阪市東住吉区田辺本町に大型爆弾を投下しました。現在の田辺小学校の北側の辺りです。爆弾が投下された地域は家屋疎開がおこなわれていたものの、警察局がその日に作成した「空襲被害状況に関する件」では死者四人、重傷八人、軽傷七七人、行方不明五人、全壊二〇三戸、半壊二一八戸、罹災者一三〇二人と記され、戦後大阪市が作成した「昭和二〇年大阪市戦災概観」では死者七人、重軽傷者七三人、消失倒壊戸数四八五戸、罹災者一六四五人と被害が記録されています。当時人々はこの爆弾について知る限りの大型爆弾ということで「1トン爆弾」が投下されたと噂していました。ところがこの爆弾は1トンどころか実際は5トン爆弾だったのです。それも“模擬原爆”という原爆の投下訓練用の爆弾だったのです。この事実が分かったのは今から一〇年前です。「春日井の戦争を記録する会」が国会図書館で戦時中のアメリカ軍の文書を閲覧したことから明らかになりました。田辺に模擬原爆が投下されて一一日後に広島に、さらに一四日後に長崎に本物の原爆が投下されました。人類史上に残る悲惨な結果は皆さんご存じの通りです。

「北田辺のまちづくりと歴史を考える会」は北田辺を中心に田辺地域の歴史とまちづくりを考えてきました。田辺は古代からの古い歴史をもち中世、近世を経てきました。そして田辺が現代史で広島、長崎への原爆投下とつながっていたのは驚くべき事実でした。この事実は田辺でも余り知られていませんでした。今年春、模擬原爆でお父さんを亡くされた村田保春さんが投下地近くに犠牲者の慰霊碑を建立されました。私達は七月二五日と二六日の両日に模擬原爆の集い、展示、追悼式典を行うことで模擬原爆、原爆の犠牲者を慰霊し、さらにこの歴史の事実を多くの人が語り継ぎ、人々の平和への思いが高まることを願います。

北田辺の歴史とまちづくりを考える会

田辺の模擬原爆証言集　もくじ

一　はじめに（1）
二　模擬原爆投下の事実（2）
　模擬原子爆弾の投下（2）
　模擬原爆投下の背景（2）
　春日井の戦争を記録する会の調査報告から（3）
　（写真）模擬原爆パンプキン
（資料）（4）
　509混成群団特別爆撃作戦任務一覧表
　投下地点と証言者の居場所
　田辺小学校の校舎の被災状態（絵）
　模擬原爆爆発の様子
三　証言集
証言　山崎　昇さん
　橘　博さん
　谷健一郎さん
　宇田恭子さん
　村田保春さん
　海野　修さん
　保田利男さん
　竹村梅代さん
　石橋忠男さん
　友成光吉さん
　原　章枝さん
　広島原爆体験記　飯田清和さん
証言集・平成十四年版
　吉川金章さん
　平部章子さん
　垣村照子さん
　藤田典久さん
　西本慶子さん

二　摸擬原爆投下の事実

摸擬原子爆弾の投下

小山仁示（関西大学名誉教授）

原子爆弾投下には、厳重な秘密とともに、綿密な訓練が必要であった。九〇〇〇メートル前後の超高度から投下し、五〇秒くらい経過してから爆発するとして、原爆はB２９の進路と同方向に落下していくから、そのままではB２９は原爆爆発で生じる衝撃波（一万三〇〇〇メートルに及ぶと推定）に巻き込まれてしまう。そこで原爆投下直後、巨大なB２９の期待を右へ一五〇～一五五度急反転させて退避させることで、原爆の破壊力から逃れるという先方が採用されたのである。この訓練は、アメリカ本土でも、マリアナ基地周辺でも繰り返されたが、テニアン北飛行場配属の原爆投下任務を帯びた第五〇九混成航空群は、七月二〇日から日本本土で総仕上げの演習を開始した。七月二十日、二十四日、二十六日、二十九日と三八地点を目標にも摸擬原爆で演習を実施した後、八月六日、広島に原爆を投下した。次いで八月八日に五地点を目標に演習がおこなわれ、九日に長崎の原爆投下となった。そして、八月十四日、日本の降伏が決定的となっており、かつアメリカ軍としては保有原爆が一個もない段階で、愛知県内への七個の摸擬原爆投下がおこなわれてのである。

摸擬原爆というのは、長崎に投下されたプルトニウム原爆と形状・重量が同じで、通常爆撃弾用のＴＭＴ爆薬を充填し、重量一万ポンド、直径一・五二メートル、長さ三・二五メートルの巨大なもので、カボチャのような形なのでパンプキン爆弾と呼ばれた。米トンでは二〇〇〇ポンド（約九〇〇キログラム）が一トンであり、二〇〇〇ポンド爆弾を日本でも一トン爆弾と呼んでいたから、一万ポンドの摸擬原爆は五トン爆弾というべきものであった。

大阪湾岸地域への模擬原爆投下は、次ぎの六ヶ所を目標に行われた。

七月二四日　大阪鉄道局鷹取工機部（神戸）、川崎車両（神戸）、三菱重工業神戸造船場（神戸）、神戸製鋼所本社工場（神戸）

七月二六日　大阪市東住吉区田辺本町（現田辺二丁目）

七月二九日　東亜燃料工業和歌山製油所（初島、現有田市）

ほかに、当時の中部軍管区（近畿地方と福井県）内で摸擬原爆が投下されたのは、七月二四日東洋レーヨン滋賀工場（滋賀県大津市）、七月二九日舞鶴海軍工場（京都府舞鶴市）、八月八日東洋紡績敦賀人絹工場（福井県敦賀市）である。

太平洋戦争末期、マリアナ基地のB２９部隊が九〇・二五の地域（大阪湾岸地域）を目標としておこなった爆撃の主要なものは、以上のとおりである。

このほかに、単機、または少数機のB２９による爆撃が存在した。一九四五年三月上旬までの初期段階では、心理効果をねらった単機による夜間爆撃が市街地に対しておこなわれることが多かった。全期間を通じて、他地域を第一目標（Primary Target）としたB２９が、機体の不調、飛行条件、搭乗員の過失などの理由で臨機目標（Target of Opportunity）爆撃をおこなった場合も多い。これらについては、攻撃を受けた日本側の記録や体験談とアメリカ側の資料を丹念に照合し、検討を加える必要がある。

摸擬原爆投下の背景

北田辺の歴史とまちづくりを考える会

第二次世界大戦の末期、ナチスドイツによる原爆開発の脅威に対抗して、アメリカ政府と科学者は総力をあげて原子爆弾開発を目的とした「マンハッタン計画」を進めました。ドイツの無条件降伏後は対日使用が前提となり、科学者および兵器専門家によって構成される委員会において、日本国内の原爆投下目標地が選定されました。一九四四年十二月には原爆投下を機密任務とする航空部隊として、

ポール・W・チベッツ大佐を責任者とする第五〇九混成部隊が新設され、実際の原爆投下に備えて翌年七月二〇日から八月十四日まで、日本各都市で訓練用模型原子爆弾（模擬原爆）を用いた実地訓練が行われました。模擬原爆は、実際の原爆と形状及び重量がまったく同じにつくられ、5トン近い爆薬を充填した大型爆弾であったために、各地に大きな被害をもたらしました。その中の一発が大阪市内の田辺地区にも投下されていたのです。

七月二五日には広島・小倉・新潟・長崎各市を原子爆弾の投下目標とする命令書がくだされており、田辺に摸擬原爆が落とされた七月二六日当日には、アメリカ・イギリス・中国3国共同により、日本に対して無条件降伏を求めたポツダム宣言が示されました。しかし、日本国最高戦争指導会議はこれを黙殺、八月六日に広島に最初の原子爆弾が投下されました。八月八日にはソ連が対日宣戦布告し、その翌日の九日には長崎に原爆が投下されました。そして、一九四五年八月十五日正午、満州事変以来十五年、真珠湾攻撃以来三年九か月にわたる戦争は終結を迎えたのです。

わたしたち田辺地区に投下された大型爆弾と、広島と長崎の人々を襲った不遇と深い悲しみ、そして終戦は、このような恐るべき事実で深く結びついていたのです。

「春日井の戦争を記録する会」の調査報告から

この摸擬原爆の事実は、春日井市の市民グループが平成二年に国立国会図書館で戦時中のアメリカ軍の文書を閲覧し発見しました。

①「第五〇九混成群団特別爆撃作戦任務の統計表および地図」（Statistical Table and Map of Special Bombing Missions,509th Composite Group,1945）という文書が国会図書館憲制資料室のC,S,S,B,S 関係のマイクロフィルムの中に存在した。

（一九九一年一一月二日発見）

②これは「第二〇航空軍特別爆撃作戦任務（五〇九混成群団）一覧表」とその付図である。

③この文書は合衆国陸軍戦略航空司令部A2局、参謀長補佐官室目標担当部によって作成されたもので、C,S,S,B,S のレポート（例えばNO.91）にも原典として引用されている。―「5トン爆弾を投下せよ」P105―

④この表と地図によって原爆投下部隊五〇九混成群団の日本での投下訓練の全容が明確となった。

⑤期間は一九四五年七月二〇日から八月一四日までで以下の通り。

■七月二〇日　東京など東日本に十発（十ヶ所）

■7月二四日　神戸など西日本に十発（九ヶ所）

■七月二六日　名古屋、大阪、島田など市街地に十発

■八月六日　ヒロシマに原爆投下

■八月八日　四日市はじめ五ヶ所に五発

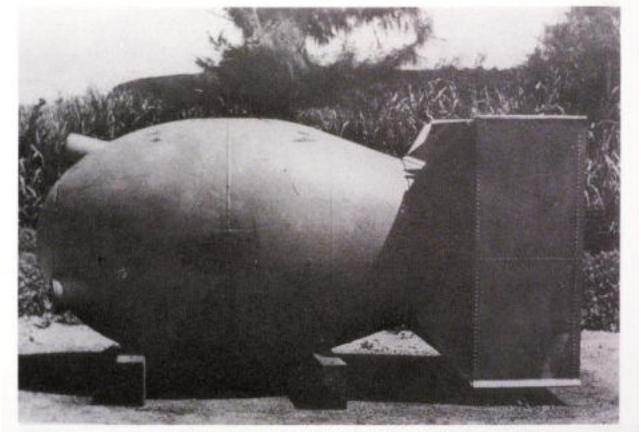
■八月九日　ナガサキに原爆投下

■八月十四日　愛知県春日井・豊田に七発

⑥原爆はすべてB-29一機に一発の一万ポンド・ライトケース（軽器）特性が使われており、これはパンプキンと呼ばれていた。また、これは長崎に投下されたファットマン（プルトニウム爆弾）と同型・同重量に造られていた。

⑦訓練は原爆投下時と同じ状況で行うように司令されており、高度三万フィート前後（一万メートル）から可能な限り目視で行われるものであった。

参考―『航空ジャーナル』昭和五九年九月臨時号より



7．模擬原爆（10,000ポンド軽筒爆弾）パンプキン

(A)　509混成群団特別爆撃作戦任務一覧

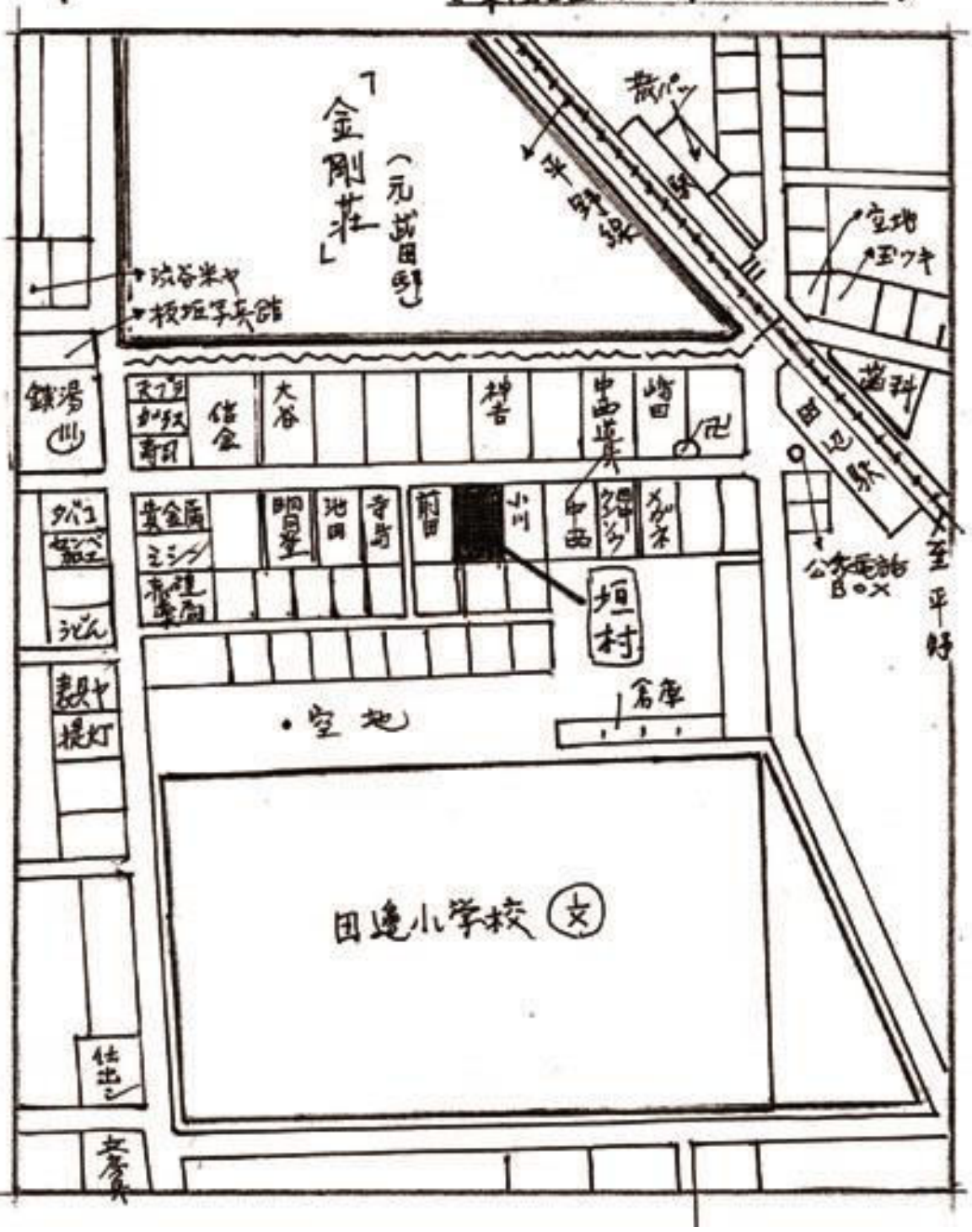
若狭の戦争を記録する会 1992.1.7

No>	日付	Mission No.	R(レーダー) V(目視)	爆撃高度 (フィート)	J.T.G 目標コード	目標名称	<着弾地点>	評価
1	1945・7・20	Mission 1	R	28,000	90:14-Urban	茨城県（北茨城市）大津市街地	< ? >	N
2	〃	〃	R	28,000	90:17-Urban	東京市街地	<東京駅八重洲>	N
3	〃	〃	R	28,000	90:10-Urban	福島県平（いわき市）市街地	< ? >	N
4	〃	Mission 2	R	25,000	90:10-6216	福島県福島市軽工業工場	< ? >	N
5	〃	〃	（海中投下）		90:10-1665	福島県＊	< ? >	N
6	〃	Mission 3	R	28,000	90: 9-1656	新潟県長岡市鵜津上安宅製作所	<上組村>	N
7	〃	〃	R	30,000	90:10-Urban	福島県平（いわき市）市街地	< ? >	N
8	〃	Mission 4	V	31,100～31,200	90:11-1943	富山県富山市不二越東岩瀬工場	<同工場付近>	N
9	〃	〃	V	31,100～31,200	90:11-861	富山県富山市日満アルミニウム	< ? >	H
10	〃	〃	V	31,100～31,200	90:11-6253	富山県富山市日本曹達岩瀬工場	<同工場付近>	H
11	1945・7・24	Mission 5	V	28,000	90:29-923	愛媛県新居浜市住友化学	< ? >	N
12	〃	〃	V	28,000	90:29-924	愛媛県新居浜市住友アルミニウム	< ? >	N
13	〃	〃	V	28,000	90:29-924	愛媛県新居浜市住友アルミニウム	< ? >	EX～G
14	〃	Mission 6	V	28,700	90:25-538	兵庫県神戸市＊	<東須磨>	N
15	〃	〃	V	28,400	90:25-11	兵庫県神戸市川崎車両	<川崎車両>	N
16	〃	〃	V	23,200	90:25-169	兵庫県神戸市三菱重工神戸造船所	<三菱重工>	N
17	〃	〃	V	28,000	90:25-1768	兵庫県神戸市神戸製鋼	<神戸製鋼>	N
18	〃	Mission 7	R	28,000	90:20-1737	三重県四日市市重工業工場	<千歳町>	N
19	〃	〃	V	28,000	90:25- 滋賀県 ~~大阪府堺市~~ 東洋レーヨン	< 〃 多賀町 東洋レーヨン		EX
20	〃	〃	V	28,000	90:20-Urban	岐阜県大垣市市街地	<同市高砂町>	N
21	1945・7・26	Mission 8	R	27,000	90: 9-Urban	新潟県柏崎市市街地	<刈羽郡>	EX
22	〃	〃	V	28,000	90: 9-	37-43N 139-31E（鳥井峠付近）	<東蒲原郡>	N
23	〃	〃	V	28,000	90:14-1492	茨城県日立市銅鉱山・製錬所	<同市内>	N
24	〃	〃	V	27,000	90:10-Urban	福島県平（いわき市）工業市街地	<平駅西>	G
25	〃	Mission 9	V	29,000	90:18-Urban	静岡県島田市市街地	<同市風町>	EX
26	〃	〃	R	27,000	90:20-Urban	愛知県名古屋市市街地	<同市昭和区>	N
27	〃	〃	V	28,000	90:21-Urban	静岡県浜松市市街地	<同市将監>	EX
28	〃	〃	R	29,000	90:11-Urban	富山県富山市市街地	<富山市豊田>	N
29	〃	〃	V	29,000	90:25-Urban	大阪府大阪市市街地	<同市東住吉区内>	N
30	〃	〃	R	28,000	90:18-	静岡県焼津市鉄道操車場	< ? >	N
31	1945・7・29	Mission 10	V	27,700	90:32-818	山口県宇部市宇部窒素肥料会社	<同付近>>	EX
32	〃	〃	V	26,500	90:32-1844	山口県宇部市宇部曹達工業	<宇部曹達工業>	EX
33	〃	〃	V	28,000	90:32-1880	山口県宇部市日本発動機油	<同付近>	G
34	〃	Mission 11		28,900	90:10-	福島県郡山市軽工業工場	<日東紡績>	EX
35	〃	〃		29,300	90:17-357	東京都下中島飛行機武蔵野製作所	<西武ﾊﾟｾﾞｵ南>	P
36	〃	〃		29,300	90:10-	福島県郡山市操車場	<郡山駅>	EX
37	〃	Mission 12	V	30,000	90:25-	和歌山県石油精製工場	<有田市内東亜燃料竹田住宅裏山>	EX
38	〃	〃	V	26,700	90:22-1041	京都府舞鶴市海軍基地	<舞鶴工廠>	EX
39	45. 8. 8	Mission 14		29,000	90:31-＊	愛媛県宇和島市組立工場	<日振新田・航空隊基地>	EX～G
40	〃	〃		30,000	90:22-6126	福井県敦賀市化学工場	<長沢北>	EX～G
41	〃	〃		28,500	90:27-Urban	徳島県徳島市市街地	< ? >	EX～G
42	〃	Mission 15		29,000	90:20-	三重県四日市市重工業工場	<千歳橋付近他>	EX
43	〃	〃		29,000	90:20-1684	三重県四日市市内部川精油所	<千歳橋付近他>	G
44	1945・8・14	Mission 17		29,000	90:20-200	愛知県春日井市名古屋工廠鳥居松製造所	<同工廠内>	EX
45	〃	〃		29,000	90:20-200	愛知県春日井市名古屋工廠鳥居松製造所	<入ケ島>	EX
46	〃	〃		29,000	90:20-200	愛知県春日井市名古屋工廠鳥居松製造所	<上条町>	P
47	〃	〃		29,000	90:20-200	愛知県春日井市名古屋工廠鳥居松製造所	<廠来製造所第三工場>	UN
48	〃	Mission 18		29,000～30,000	90:20-1139	愛知県豊田市トヨタ自動車工場	<渡会町>	P
49	〃	〃		29,000～30,000	90:20-1139	愛知県豊田市トヨタ自動車工場	<前山社宅付近>	P
50	〃	〃		29,000～30,000	90:20-1139	愛知県豊田市トヨタ自動車工場	<挙母工場内>	G
<参考>	1945・8・6	Mission 13		30,200	90:30	広島	（原爆）	
	1945・8・9	Mission 16		28,000	90:36- Urban	長崎市街地	（原爆）	

<注>
1　原資料は「SUPPLEMENTARY TABLE TWENTIETH AIR FORCE SPECIAL BOMBING MISSIONS 509TH COMPOSITE GROUP」（The Commanding General USASTAF <アメリカ陸軍戦略航空軍>　1 October 1945）
2　☆の欄は原資料に基づく
3　行頭の<No>は便宜的につけたもの
4　J.T.G ＝米軍統合目標部
5　＊＝以下原資料判読不能・不明部分
6　評価欄：EX＝Excellent、G＝Good、H＝Hit、N＝None、P＝Poor、UN＝Unobserved

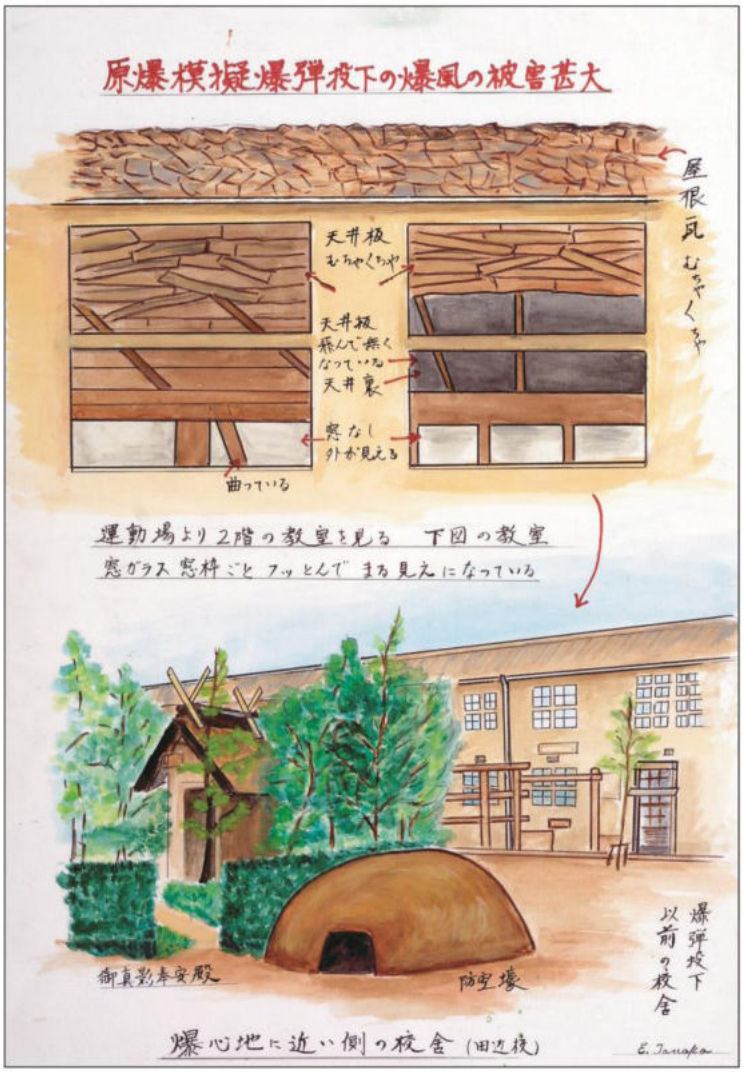
4 爆弾投下「金剛荘」付近図

（東住吉区田辺本町4丁目26）



※この中の地図は、主人垣村が、田辺小学校を卒業したあと、昭和八年に兵役につくまで、田辺本町四丁目に住んでいた当時の記憶をたどり乍ら、爆弾地の周辺を挿入したもの。

模擬原爆投下後の田辺小学校の様子（絵：田中さん）



田辺に模擬原爆が投下された時の様子（絵：山内さん）

（上記２点の絵はいずれもピース大阪所蔵）

終戦時の田辺の住宅地図を復元

「人気色（ひとげしき）」

被災前の町並地図を復元された山坂一丁目在住の

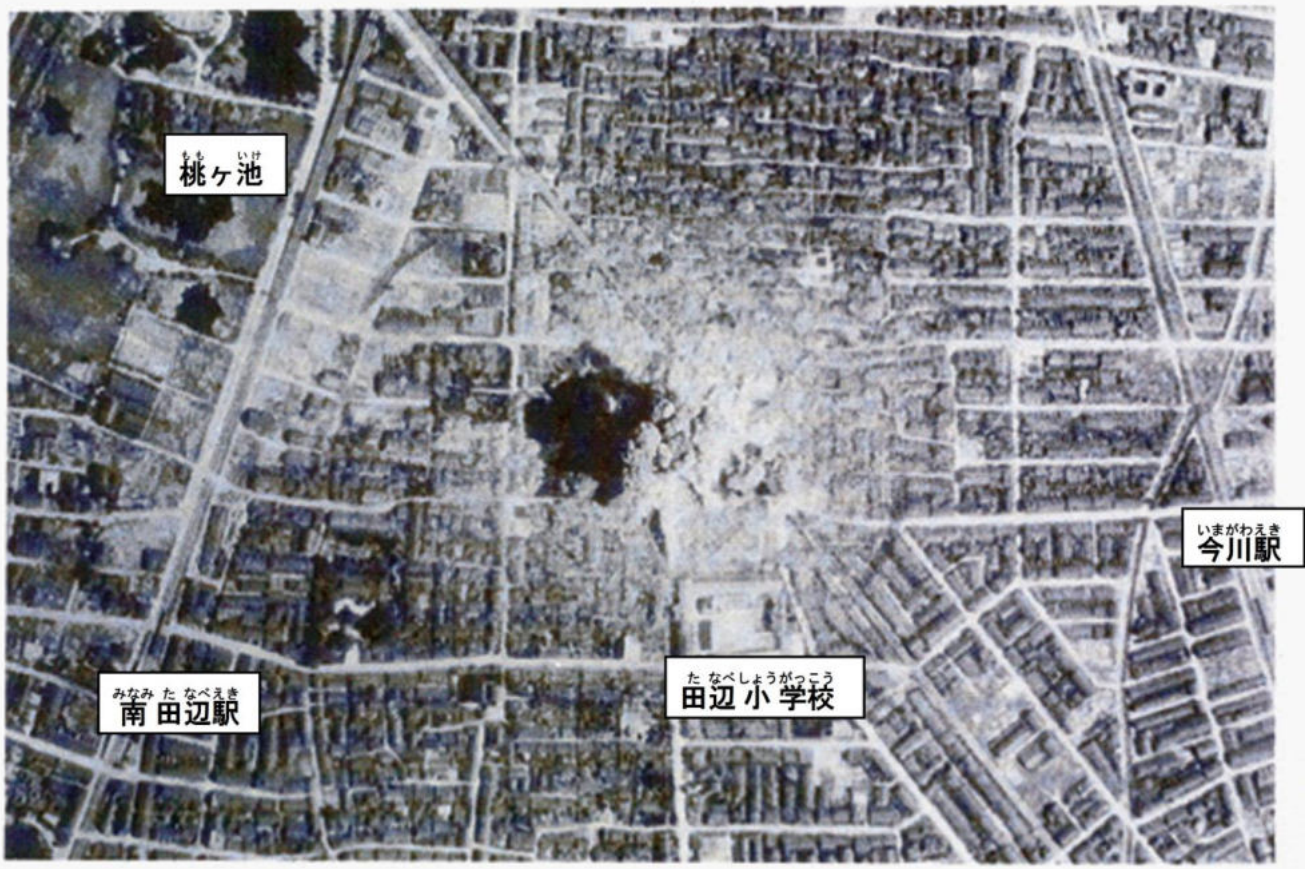
井上　幾子さん（左）
井上　孝子さん（右）

昭和20年7月26日、東住吉区内に原爆模擬爆弾が投下され、現在の田辺一丁目（旧田辺本町四丁目）にあった、料亭「金剛荘」が直撃を受けました。当時現場からわずか200mのところに住んでおられたお二人が、被災前の町並地図を復元されました。

孝子「大阪大空襲の体験を語る会が昨年出版した〝原爆模擬爆弾の証言集〟を親戚の者が持って来、爆弾投下前の町並の地図を書いて欲しいと頼まれました。被災され亡くなられた方々の供養にでもなればと思い、引き受けましたが、参考になるような当時の地図はどこにも残っておらず、昭和13年の地図がやっと一枚みつかりました。それを手がかりに従姉妹と一緒に古い記憶をたどったり、古くから住んでおられる方々にお話を伺ったりして、商店、郵便局、風呂屋、住宅などを書き込みましたが、まだ空白の部分もありますので除々に埋めてゆきたいと思っています」

幾子「金剛荘に爆弾が落とされた日、私と母は畑に出ていました。午前9時か10時頃、飛行機が来たので私は母の手を引っ張るようにして防空壕に入りました。そのとたん、ドカンと大きな爆発がありまさに間一髪私達は助かりました。家も幸い無事でしたが、畳には大きな三角定規のようなガラス片が無数に突きささり、家中足の踏み場もない程散乱していました。あの爆弾が、原爆投下の際強い爆風から飛行機が逃げるための練習用であったと知ったのは最近の事です。もしあの時、爆弾投下のスイッチが100分の何秒かでもずれていたら、私は今ここにこうしていなかったかも知れません。幸い無事でしたので、当時の体験や事実を今のうちに少しでも残そうと思い、地図作りに協力しました」

（「リビングレポート東住吉」（1994年8月号より））



19. バンブキンの爆発. 大阪市東住吉区田辺本町. 1945年7月26日

三　聞き取りによる証言集

これから掲載する証言集は、田辺の摸擬原爆の被害に遭われた方やその遺族の方、そして原爆で被害に遭われた方にお話いただいた貴重な証言です。

山崎昇さん

「昭和２０年７月２６日の戦慄について」と題する当時の日記

それは七月二十六日の事だった。一トンのロケット爆弾が私の家の裏の方、約一万町ばかりの金剛荘と言う料理屋に落ちた。そして、爆薬のもつ破壊と伝う機能が遺憾なく発揮された。多数の人命が消殺され、無数の家屋が破壊された。私と母と一緒に全身に黒煙となった砂塵を浴びて防空壕の中に潜り込んだので、やっと助かった。それまで、私は繪を描いていた。それは思い出のために遺してあるが、今もあのグミの繪の素晴らしく荒い筆使いの跡に、微かに当時の砂塵の跡が消えずに残っている。それを見ると、大ザッパな描き振りに、あの日の落ち着かぬ、投げやりな氣持ちがどこかに残っているように思う。

警報解除の後から被弾してフラフラ飛んできたB-２９の一機が落としたものである。それはフラフラの一機が、しかも、心配と焦慮と投げやりになった名も知らぬアメリカの搭乗員が投下したものであるにしても、その威力は余りに大に過ぎる。人間が人間を破壊したというよりも、何だか大きな機械が一撃にその巨大な暴力を遂しうしたというのが適切なようである。ウウ・・・だか、ザザ・・・だか、ちょっと形容し難い空気を切るロケット弾の落下音が聞こえてきた瞬間、この辺の總ての人々は浮き腰になったであろう。その同じ瞬間、大きな破裂音は人々の耳を通過してしまって、パラパラパラ繪・・・と伝う音と伴に、真黒な砂煙で晝の光は夜の闇のようになった。しかも、その闇は不氣味な熱氣を帯びていた。私達は時間的に強迫觀念に襲われる餘裕を持たずに、直すぐに恐怖の現実に襲われた。それはまだしも幸福であった。

何か火の粉らしいものが濠の外に落ちた。私と母は火事の心配から、二人共に焦々した氣持ちだった。間もなく、ほんのり明るくなって来たので濠の外に飛び出した。幸い火事らしい氣配はなかった。顔中全身、口や鼻孔まで砂まみれになって、何だか氣色悪い中（うち）にも、思わず心の中で叫んだ。『天は自ら助くる者を助く』と。その時、同じように砂まみれでパンツ一枚になったＨさんの主人が、私と顔を見合わして思わず笑った。それから、人々は爆風で傾斜して危なげな屋根に積もった砂塵や、足の踏み場もない程乱れた家の中の整理に一日の殆どを費やした。

道路に出てみると、眼に何かの破片が入ったらしい女が、ドス黒い血の流れた眼を両手で押へ、あちこち血で黒く染まった身形をして、唯、黙々と静かな早い歩調で歩いていった。担架に乗った外傷人も相当に運ばれていった。あたりは手もつけられぬ程散乱している。人は時々狂騒的錯覚の中に残虐な流血を想像して、ある種の美の衝動にかられることがあるようである。それは王者の虚栄であると共に、人間の獣性が夢想の中に描く凄愴美と伝いうものである。だが、今この生生しい現実の姿を見て、思わず、嫌悪の情にかられた。勿論、見渡す限り汚濁醜態の外ではない。それは決して美ではない。私はゾッとする身震いを感じた。それらの姿を見るに忍びなかった。その日の晩、ふとあのオドケタ言葉を思い浮かべていた。『命あっての物種じゃ。死んで花見が咲くもんか。』同時に生きなければと言う意志がいよいよ強固に魂の底に蠢いた。（昭和２０年１０月３日夜、菊龍子）

（以上の文章表現は当時書かれた日記をそのまま掲載しました）

橘　博さん

当時１６歳、自宅は田辺一丁目だが旧制中学生の勤労動員で柏原の工場で地雷の部品作りをしていた。

あの当時は戦時中のことだから、

工場の方に動員されて行ってました。（動員先は）点々としましたけれど、八尾の北よりに柏原というところがあって、太田の飛行場の横の工場にいました。学生でありながら勉強しないで動員されていました。（工場では）地雷の部品をつくっていました。（模擬原爆が落とされた）あの時間は工場の昼休みで、漠然とすわっていたら、しばらくしたら空襲警報が発令して、しばらくしてブーンとB29が飛んできて、しばらくしたら（爆弾を）落としたのを見ました。柏原からここまで爆撃で列車はみな止まっていたので、歩いてこちら（田辺）に帰ってきたが、この辺一帯その爆弾の影響で破片で、石が飛んだり、こんな木が飛んだりして、橘さんの屋根もかなり石が落ちてあったそうです。谷さんところも石が飛んできたといっていました。たまたま、橘さんの親類の方が、その爆弾をみて、あっこれは橘の家に爆弾落ちたいうことで、びっくりして飛んできたという状態でした。金剛荘はその日は見にいかなくて、後で徐々にわかってきたとのこと。とにかく大きな穴というか池みたいなもんができていたのを覚えているとのことでした。金剛荘の印象としては黒塗りのたいへん塀の高いのが延々と続いていたのは覚えてて、ずいぶん広い大きなところや、屋敷やなあというような感じで、周辺の民家とも比べて目立っていたとのことでした。模擬原爆だとわかったのは最近のことで、それまでは普通の爆弾だと思っていたし、近元の人は「1トン爆弾落ちたで」言っていたそうです。それまで田辺は空襲の被害が少なく、南の方で5～6軒焼けたくらいで、あれだけの戦争で市内は被害にあったけど、こちらの方は少なかったので、橘さんは「これはすごいもんを落しよったんやな」と思いました。「あれが本物やったらたいへんなことになってたと思てます。」広島に新しい爆弾が落ちたことは後で新聞で知ったが、その当時の状態を知る方法は新聞しかなく、新聞にはさほど大した報道はされてなかったのに、後で徐々にわかってきたことと、ギャップが大きかったといいます。また、その頃の思い出をお聞きしたら、学校行っても勉強するより教師になぐられに行っているようなもので、それから走らされたり、それが（戦争中の記憶として）強烈に残っているとのことでした。

谷健一郎さん

当時10歳、小学校5年生、松原市の疎開地で知る、田辺1丁目の自宅が被爆

谷さんは、爆弾が落ちたとき学童疎開で親戚がある松原市の三宅にいました。大人がわいわい騒ぐので見ると黒い煙が上がっていて「あれは田辺らしい。帰ったらどうや」と言われて、電車で松原から今川へ、そこから歩いて帰りました。お父さんが家にいました。家は倒れていなかったがめちゃくちゃでした。奥の間のガラスが割れていたし、米倉の大きな、縦横一八〇の木の2枚戸がボキッと折れて、くの字型に曲がっていました。屋根瓦は完全に飛んでいました。爆弾が落ちたときのお父さんの話では、当時、家の横に朝鮮の人を使って作った貯水池があり、そこに残土を盛り上げて防空壕が作ってありました。空からフーセン見たいのが落ちてきて膨らんできました。これはあかんと思って防空壕にあわてて入りました。外は何にも分からないほど真っ暗になっていました。のどが痛くてどうしょうもなく、ぼちぼち明るくなって出てきました。爆弾で何人かが亡くなりました。金剛荘のずっと向こう西の方を北へ行った外れに長屋があってそこの人が亡くなりました。数日後爆弾が落ちたところはえぐられて水が溜まって池の様になっていました。

宇田恭子さん

当時4歳、田辺一丁目、田辺の大念寺北の自宅で体験

金剛荘に爆

２９が一機だというので自分の家から外に出て、空を見ていました。すると、Ｂ２９からなにか離れるのが見え、まるい銀色の野球のボールより少し大きな光るものがシャーという音とともに落ちてきました。えらい爆発音と同時に私は母の下にうつ伏せて、そのまま道に伏せておりました。顔を上げた時は、砂ほこりで、一時何も見えませんでした。町会の役員さんが、怪我はないかとたずねまわっておられました。わたしの家の大きな窓格子が、すっ飛んでなくなっていました。家の玄関の戸も内側に倒れていました。そして、大屋根を突き破って、金剛荘の灯籠の一部らしい二〇数センチ大の石の塊が二階の物置に飛んで来ました。ガラス窓はこなごなで、爆風でその方面に直接あたっている所が、みなつぶれていましたし、わたしの家の場合は、南西の方向にありましたから、北側は壊れていましたが、南側は壊れていませんでした。わたしのまわりには怪我人もいないので、それほどの恐怖感はありませんでした。空襲の方が遙かに印象が強烈でした。

金剛荘は料理屋でしたから、よく水が打たれていて、玄関に植木があったという程度しかおぼえていません。投下跡に遊びに行いったときは、庭などの石や塀などもつぶれており、子供でしたから、その上を歩いたり、石の上に座ったりしていました。

村田保春さん

当時２８歳、豊川市の軍事工場で勤労、お父さんが模擬原爆で死亡。爆死者のため慰霊碑を建立した。

村田さんは、工場の休暇で大和郡山にいました。村田さんのお父さん、繁太郎さん（当時５５歳）は田辺の家にいました。その家は２階建てで金剛荘の西隣、田辺小学校の北西にありました。家は広く庭には大きな木々が植わっていました。軍需品生産をしていた早川電機から村田さんの家の庭を貸してもらえないかという話があり、２６日の夕方監督官が来るので、お父さんはその日の午前から植木職人と植木の手入れをしていました。爆弾が落ちてきたのに気づき植木職人はその場に伏せました。お父さんは防空壕に走り込もうとしたが、その途中で厚い壁土の下敷きになって圧死しました。大和郡山で田辺の家が爆弾でえらいことになっていると聞いて村田さんが駆けつけたとき、２階建ての家がつぶれ、大木が倒れて戦場の様でした。その頃、大阪には霊柩車がなく、お父さんの遺体を大八車に乗せて鶴ヶ丘駅東にあった焼き場に運びました。

海野　修さん

当時小学校２年北田辺６丁目１１-１３の自宅で体験。

普通は大阪の空襲以降は、学校はみんな縁故疎開か全員集団疎開か、全部まとめて集団疎開したのだが、海野さんだけがなんで疎開しなかったというとちょっと理由があって、お父様が兵隊にとられて出征していく時に、家を守んのは男でないとあかんと、たとえ子どもであっても家を守れ、といって出征していったので、海野さんだけは疎開しなかったとのことです。田辺小学校で疎開しなかったのは４～５人くらいでした。あとは全員先生以下、富田林の方へ疎開してたから、この辺は大半が空き家でした。毎日学校行っても生徒４～５人やから、毎日が遊びみたいなもんで、それよりも毎日食べること、食糧をどうするかの方が心配でした。たまたま今回の爆弾の日は駒川の家にいた時に、お父上の兄弟でニューギニアへ出征したおじさんがニューギニアの戦地から手紙をよこしました。その手紙を、海野さんのお母さんに読んでほしいと連絡があって、朝の７時頃、駒川の家を出て田辺の家に来た。で、お婆さんとおばさんと、お母さんと海野さんと、赤ん坊の妹とでその手紙を読んでいました。

普通は鳴り方で警戒警報、空襲警報て決まっていたはずが、あの日はぶっつけ本番で空襲警報が鳴って、海野さんだけが家の前の道

路に出た。他はみんな家の中にいて、いつもは（Ｂ２９は）編隊でくるものが、あの日は一機だけでした。それも、東の方から西の方に飛んでいきました。飛んできたところはみてないが、Ｂ２９がちょうど自分の頭の上にいるのは見えていた。じいっと見ていると、黒い、最初は仁丹くらいのものがぽつんと飛行機から離れました。それから、何十秒か、ぐぉーという、ちょっと今の時代で例える音はない、地獄に引きづられるような音がした。焼夷弾はザァー言う、雨みたいな音がするけど、グォー、ドカンと音がして、気ついたら向かいの家の下敷きになっていました。だから、爆風で約５～６ｍくらいふっとばされたのです。誰も助けてくれなかったんで、はって出てくるのに１時間くらいかかり、目の前にある瓦も板を割ったみたいに、まったくぺっしゃんこでした。ちょうど表のところまで体半分出た時に、「助けてくれ」といったけど、埃が舞いあがるので、もう時間にして２０～３０分したら声が出なくなりました。子どもがここにいるというのは聞こえていても、誰も助けてくれませんでした。結局、自分ではって出てきたんは昼前でした。あわてて自分とこの家の中に、お母さんやお婆さんが無事か瓦どけて探したけどいませんでした。お母さんやお婆さんはガラスでけがしました。

今から思えば（爆風は）三百から五百メーターくらいのとこまで達したのではと思います。音がすごかった。出てきたら金剛荘へ落ちたと。その頃の、もっぱらの大人の噂では、金剛荘の東側をチンチン電車が走っていて、鉄道が狙われて、線路（を狙った）がちょっとずれて金剛荘に落ちたんではないかと。金剛荘のおばあちゃんがピアノの下で亡くなったっていうことも、２～３日たって聞きました。「そらもう、あれは地獄ですわ。」家族を探すのに、家のぐるりにいたら、ケガの重い人が田辺小学校に寝てるいうので行ってみたが、（ケガ人が）講堂にならんでおり、それが女と子どもばっかりでした。女の人はあの時代、髪の長い人ばっかりでしたが、血みどろの上に、爆風で舞い上がった白い埃がいっぱいべっとり付いて、まるで映画に出てくる幽霊にたいな状態でずらっと５０人くらい並んでいました。みんな唸っていて、痛い痛いと言う人もあれば、助けてくれ言う人もある。一人ずつ顔を見ていったが、お母さんもおばあさんもいませんでした。

とにかく、あの一日のことだけは、６０年近くたっているが、鮮明に覚えています。最初のグォーというのは、トンネルに入ったような音で、最後はなんか吸い込まれるような音だったと言います。多少は本能的に逃げようという、それでも爆風に飛ばされて、気いついたら（向かいの家の）玄関を通りすぎて台所の土間まで飛ばされていました。家の下敷きになって痛いと気づいた時に、「あれ助かったんやな」、と思ったそうです。柱がのってるは、瓦はあるはで、体にのっているものをどけるのに１時間はかかってたと思います。はってでも出よと思ってでましたが、２～３時間はかかりました。体が半分でたときに、ゲートルがみえたので、これは大人やと思って、助けてと声を出したけど助けてくれなかって、やっぱり自分ではって出なしかたない思って、三〇分はかかり、頭にかなりのこぶができました。手はすりきずあったけど、あとはありませんでした。お母さんとかおばあちゃん、妹さんはガラスの破片で眉間のところ切ったり、妹さんはおふくろが胸の下に隠したんで、一見傷はないけど、けがしてました。

保田利男さん

当時は小学校１年生、小学校からの下校中に被災

夏休みの、何か変速授業でしたんで、１時限目が終了したところで警戒警報と空襲警報が同時発令されて、隣りの同級生と下校して、途中で着弾におうたという状態ですわ。学校の北側でキィーンという音で、Ｂ２９が飛行しとって、あれ何か落としたないうことで、するとピンポン球のようなものが飛行機から落とされて、数秒のうちに大きくドッチボールいうか野球のボールくらいになって、あと

はドーンという音と衝撃とが同時に、1～2分くらいでしょうね、南の方から、ちょうどいたところが道幅4m弱の細い道でしたので、大きな音と直後に南側の細い位置から砂煙いうんですか、砂塵がせまってきたんで、とっさに二人して道路にふせたいう形ですね。しばらくは真っ白で1m先が見えないような形で、何が何かわからなかったです。そして、埃とか、一瞬のことですね、目をつぶって、我にかえって我が家に帰ったんです。帰り際、右左の民家の窓ガラスが粉々にわれて、たまたま私達が伏せた南側のところにタバコ屋がありまして、そこのタバコ屋の陳列ケースは爆風でめろめろに破損されて、そこに店番してたおばあちゃんが血だらけになって、大騒ぎしてはったです。途中で私のおじさんと会いまして、としちゃん大きな爆弾落ちたらしいんで、急いで家帰りや、気をつけて帰りや言うことで、言葉かけられて。急いで家にかけつけたんです。そうすると、うちの家も南むきの家だったんですが、西側の金剛荘の方は爆風で壁も落ちておったし、ガラスも粉々という状態でした。どこに何があったのかわからかなったので、爆弾だろうなということで、幼心に震えておった状態でした。

当時は習慣として枕元にズボン、靴下、ジャンバーなど衣服をたたんで寝るような形です。そんな中、2～3回夜中に空襲警報でうるし堤の方に避難した記憶がありますが、爆弾いうのは初めてでした。その直後に友達と金剛荘に友達よって南海平野線の田辺の駅のプラットホームにいたとき、グラマンに機銃掃射でねらわれたこともありました。そら、爆弾落ちた2～3日後の昼間の話ですわ。金剛荘の（爆弾の）くぼみのあたっところに水がたまっておって、冬場になると凧上げの場所になってよくいった。直後に爆風でつぶれた家の廃材を燃料にして生活に使っていて、廃材をとりにいった記憶もある。くぼみは5～6mの円形のものがありました。水がたまってましてすり鉢状態でした。囲いなどしてなくて放りっぱなしでした。幼心であれは爆弾やと思いましたが、ただ我が家に一時もはやく帰りたいという気持ちが強かったですね。近所の人では、爆弾落ちたり、焼夷弾が落ちたり、日常茶飯事だったので、あの爆弾が落ちたことのショックは少なかった。大きくなってヒロシマを訪れて悲惨さを知って、田辺の爆弾がそれが事前訓練だったということで、あらためて身震いしたようなことです。

竹村梅代さん

当時19歳、女子青年団、北田辺6丁目で体験

あの日7月26日も、いつも朝8時になると、警戒警報が流れるので、聞いていましたら、すぐに、空襲警報が発せられた。そのうち火の見櫓に上っていた在郷軍人の警防団の方がカンカン半鐘を鳴らしはった。「ただの一機や」大したことないわと思って、もんぺにも着替えずに寝間着のままで、うろうろして食事でもしょうかと思っておりました。その矢先に、たたみごとボッカーンとひっくりかえってん。ボッカーンとひっくりかえってん、ウワーというて床板がいっしょに吹き飛び、たたみの下敷きになってました。わたしの家は開けっ放しにしていたので、案外に被害が少なかったけど、戸口など閉めていた家などはガラスなどは微塵にわれてしまっていた。ほかの家もたたみ飛ばされたというてましたよ。今の北田辺6丁目あたりでそういう被害がありました。爆弾投下地より五百から六百メートル離れていました。

それでえらいこっちゃ、爆弾やと思って火の見櫓の人に「どこ、どのへんが燃えてんの」と聞くと「燃えてへん、けむりや、あれやったら田辺小学校の手前、金剛荘ちゃうか」ということや。私いちびりやから走って金剛荘へ見にいった。金剛荘は跡形もなく、五〇メートルくらいの大きな穴があいて、底は浅く、すり鉢状になっていた。そこに大小の木っ端みじんになった木が散らばってた。隣に建っていた金光教の跡形もなかった。上で見てた警防団の人は「あ

の爆弾は下まで落ちんと上で炸裂して散らばった」と言うてました。しばらくして、わたしは、女子青年団であったので、町会長の三杉さんから召集がかかり、怪我人がでている。担架で運びたいので田辺駅に行ってほしいと連絡がはいった。

現場には、このへんのお医者さんみんな来てた。文の里の医者もきており、怪我をしていても歩ける人には肩を貸し、歩けない人には担架で、田辺小学校に運んだ。頭や手から血を流した人が治療を受けていた。この当時、男の青年は兵隊か予科練に行っており、平野線の５０メートル周囲は強制疎開地やった、家は空き家で、田辺駅で降りた人が遭うたみたい。あとで聞いた話、この前夜、この金剛荘には三百人の兵隊が宿泊していて、この兵隊達が出ていったあとに爆撃が落ちた。そんなようけとまってたやろかいう話をしてたけど。わたしは、この召集の後、バケツを持って金剛荘跡に焚き物拾いに行った。（当時燃料不足でみんな困っていたから）そこらへんに散乱している木片を持ち帰り火をつけたけれども、燃えへんかった。今のビニールの袋を燃やしてるといっしょ、煙だけ。

石橋忠男さん
当時９歳、北田辺小学校４年生
北田辺６丁目１１-１３の自宅で
体験

あの日は暑かった。学童疎開から家に帰っていた。家族は勤労動員などで外出、一人で留守番をしていた。近所の友達と家の前にいると空襲警報は鳴らなかったように思うが飛行機の音がした。上を見ると一機だけ、一機だけやからどうってことないと見てると黒い物が落ちてくる。砲丸のような物が落ちてくるというんで家の中に飛び込んだ。数秒だと思う。その瞬間、「ダアー」っというて、地震みたいに、縦型直下地震みたいにいったん持ち上げられて落ちた。家の前が一面５枚ほどのガラス戸やってガラスが全部割れた。その時、破片が手首に当たって、未だに手首に傷が残っている。子供でどうしょうもない。家がいっぺん持ち上げられてどんと落ちた状態で壁のあちこちにひび、家の中はほこりまみれ、食器棚もほこりが降って真白気。とにかく地震の後のよう。

この近辺南の方、南海電車平野線田辺駅のあたりで土煙が上がって落ちたというんで、そこへの行きすがら西向いている屋根がほとんどずり落ちていましたわ。しばらくすると怪我した人が、頭から血を流した人がぞろぞろ通る。お医者の三杉さんの方へぞろぞろいったのを覚えている。駅前に散髪屋さんがあって、お客が前の鏡の破片に当たった人もいたらしい。不思議に、落ちてきた角度によるのか爆風があたった所とあたってない所がある。近くでもほとんど被害に遭うてないところもあるし、ちょっと離れていても瓦が落ちてる所もある。爆弾が落とされ後「何であんなとこへ一発おとすんやろ、まちごうてか、電車狙てんか、それにしてもあんなちっぽけな電車。金剛荘も軍事寮で無かったし、何でやろ」と言うことを人々が言っていた。また爆弾が落ちたところには、くぼみが出来て雨が貯まって大きな池になっていた。直径二～三〇メートル、深さ二メートルくらいあったと思う。

友成光吉さん
当時１４歳、旧制天王寺中学２年生　現在の北田辺六丁目四番地で
体験

あの日は夏休みだった。前日に期末試験が終わって、くたくたで家で寝ていた。いい天気だった。当時Ｂ２９が侵入すると警戒警報が鳴った。それで来たなと思った。サイレンが鳴り終わると同時に爆音が聞こえた。その当時は訓練されていたので敏感に「あっ、一機」だと思った。北田辺から見ると二上山から大阪の方へ、北の方へ飛んで来た。その辺りに八尾飛行場がある。当時は大正飛行場と言っていた。そこには軍用機がたくさんいるから高射砲陣地がバッバッと撃ち出した。それまでに三月や六月に大空襲がありこれで大阪はほとんどやられてしまった。そんな時、日本の高射砲は全然撃たない。日本の飛行機は全部逃げ出し

てしまう。そんな状況でした。高射砲は相手が一機だと、なめてボンボンと撃っていた。これは景気がいいなと思った。当時は軍国少年でしたから高見の見物とばかり大屋根に上って高射砲がＢ２９を撃つのを見ていました。Ｂ２９は相当高い所を飛んでいるので高射砲は届かない。それでも高射砲がボンボンと撃つので敵も恐れをなして大阪湾の方へ左旋回して逃げたなと私は思った。するとＢ２９の後ろにぴかっと光るものがある。おそらくこれは日本の戦闘機が追いかけているものと私は一方的に思いこんだ。ところがそれがだんだんと大きくなっていく。よく見ると羽根がない。羽根がないどころか爆弾の格好をしている。これは爆弾だと思った時には屋根の上で動けなくなった。私は屋根の棟の所にしがみついていた。それが田辺駅の付近にぱっと消えたとき、ものすごい爆発が起こって、火柱、砂ぼこり、土、家具、家の柱、石がわっとあがった。それがいったん止まって全体がゆっくりと落ちてきた。屋根の上にしがみついていた私の上にも落ちてきた。それで下の方では窓ガラスの割れる音がする。雨戸が下に落ちている。お袋がキャーッと叫んでいる。阿鼻叫喚の状態でした。やっと落ち着いた頃、屋根からこわごわおりてきたというのが実状です。

　僕はなんべんも爆弾に遭っていますから天王寺の横に大きな穴ぼこがあって、それが１トン爆弾の落ちた穴だったということでした。しかし田辺の爆弾の穴ぼこはそれより小さかった。おそらく空中爆発したものだと思う。爆弾を落とされた後、猛烈なショックを受けたせいかみんなしーんとして大騒ぎしなかった。また砂ぼこりで太陽が遮断されて中国の黄砂現象の様になる。赤黄色で夕方までそんな状態が続いた。空へゴミが、砂ぼこりと煤が舞い上がって１日かかって全体がまた降りてくる。この爆弾の時は黄色い感じで真っ暗ではなかった。金剛荘あたりから私の家の方に向かって百メートルから百五十メートルぐらいは疎開になっていた。疎開というのは学童の集団疎開と家を全部つぶしてしまうのがあった。東側、南側の家は僕らが勤労奉仕で家を引き倒してつぶしてあった。類焼をさけるためそういう措置をとっていたと思う。だから家がつぶされた所に落ちたから案外、被害が分からなかった。逆に西の方の被害が大きかった。

原　章枝さん

当時八歳、西今川１１-１１-２３の住居で体験

　原さんは当時小学生で天王寺区上本町で第３次大阪大空襲で家を焼け出され、西今川にある家の二階に避難住まいしていました。

　あの日は熱い夏の日で、家族みんな薄着でいると南側の窓を眺めていたお父さんが「爆弾が落ちて来たぞ、こっちへ落ちるぞ」と叫んだ。窓を見ると黒いもん、大きいもんが落ちてくる。えらいこっちゃ落ちてくると二階にいて逃げるに逃げられずにいると、爆弾は流れて田辺の方にどーんという地響きの様な音をして落ちた。近所の人らと自転車に乗って行くと藤棚のある大きな別荘のような家が無くなって、掘られたようにすり鉢状の穴があいて、付近のガラスは木っ端みじん、足下はガラスがいっぱい。爆風で飛ばされたたたみ一畳が電線に引っかかってぶらぶらしていた。子供ながらびっくりして帰った。死んだ人は目につかなかった。爆弾が落ちるのを見ていたお父さんの話では南向きの窓から見ていてこちらに向かって飛んできた飛行機が爆弾を落としてまた向こう向いて旋回していった。

広島原爆体験記

飯田清和さん

飯田清和さんは広島に原爆が投下されたとき9歳で、広島市の舟入国民小学校の校庭にいて被爆しました。爆心地から約八百メートルの場所でしたが奇跡的に助かりました。その後、関西に移り住まれました。飯田さんは広島の悲惨な体験を語り継いで行きたい気持を強く持っておられます。昨年のニュース報道で「大阪に模擬原爆投下」のことを知り、大阪にも原爆投下に関係する事件があったことに因縁を感じて追悼式実行委員会に連絡されてきました。飯田さんは広島に原爆が投下されてから十年目の年に、原爆投下時のすさまじい光景を文集に書かれています。飯田さんの了解を得てそれをこの証言集に掲載します。

”忘れられない、忘れてはならない”

その一

原爆広島の十回忌を迎えるにあたって、一瞬にして悲しくもまた痛ましくも消えて亡くなった二十四万七千人の霊前にこの私の手記を捧げてその冥福を祈り世界平和の永続を望みたい。人は言う。十年を一昔と。私はその一昔前の悲惨な悲惨な広島を犠牲者の冥福を祈りながら想い浮かべて見ます。

地球上に、人類始まって以来初めて、あるまじき非科学的な非現実的な姿、超現実的な悲惨な事実が最も近代的な二十世紀の今日、この人間の世に出現したのでありました。それは二十世紀の科学の驚異、原子爆弾。その炸裂！それがハンドルであったか、ボタン一つであったか我々は知りません。しかし丁度、隣人の部屋のベルでも押すようにその手は美しい近代の文明の手であり自由、平等、博愛の精神に養われた手であったのでした。近代化され合理的に装備された部屋にはＢ２９の爆音に揺らぐ香しい匂いさえも漂っていた事でありましょう。その何気ない単純な動作の内に出現した生き地獄、破壊されていった幾十万の命の叫び－そして我々同胞犠牲者の行列、犠牲の群像は手を斜め前にかかげ、低く挙げ怒る事さえも知らずにさりとて納得しがたい。余りに悲しい人間の、東洋の島しかも日本の広島の人々の群れであったのです。これが２０世紀の文明の姿なのでありました。この驚異の炸裂の一瞬を経済安定本部「戦争被害総合報告」によるものを参考にして記します。

「昭和二〇年八月六日午前八時一五分頃、広島市の中央、高度千五百メートル付近でマグネシウム爆弾様の青白い閃光を発しボンと軽く爆発した後、爆弾は赤く太い火柱を引いて六，七秒間急速に落下五百七十メートル上空（細工町、島病院付近）で大炸裂した。この炸裂は強烈きわまるもので赤青色、あるいは茶褐色味を帯びた火炎を四散し轟音と猛烈なる熱光線を放射した。さらにこの大爆発によって生じた火炎は火柱状となり爆心地上に吹き付け地上の物体を燃焼し爆風はこれら物体を吹き飛ばした。また爆心地には小さな太陽と言うべきものが出来た。それは当時火の球とも言われ、直径約百五十メートル、中心は華氏二万度という強勢の赤い塊であった。風圧の波は、時速五百乃至千里の大風を起こし全市を壊滅と灰燼に帰せしめた。またこの強勢は一尺厚みのコンクリートの背後にまでも被害の及ぶ強烈な放射熱であった。爆弾落下後相当の秒時がある。これは距離によって異なるが大体音と同じ時差である。爆発後五分ないし十五分後に市の北部地方に大驟雨が襲来した。」と以上の様に当時の模様を伝えております。

あの十年前に体験した八月六日の悲惨な“原爆広島”を思い出します。まだ若かった母と五つ年下の妹と国民学校三年生の私と三人暮らしでした。家は爆心地より二キロメートルのところにありました。すなわち一里円内に入る危険区域内にあったのです。

その日はいつになく快晴で夜露を吹き飛ばす盛夏の太陽は容赦なく照りつける活気ある日でした。庭には放たれた鶏が餌を探し、ひよこはその後を追っていました。紫、赤、白、種々の朝顔は咲きそろい葉には夜露を宿しています。どこからか小鳥のさえずりさえ聞こえて来てい

ました。連日脅かす空襲にもかかわらず勤労奉仕者を乗せた電車は轟音を残して去って行く後は七つの川の流れさえ聞こえてくる静けさ、河口にいる船の煙は水面を流れて溶けてゆく。この世には、およそ争いのことなど無いような実に平和な水の都広島の朝でした。誰もあの無惨な生き地獄を予期するものは無かったと思います。

私はいつもと同じように鞄を背負い草鞋をつっかけ学校へと急ぎました。が途中であのけたたましい警戒警報のサイレンを耳にしました。サイレンは連日の空襲を機械的に報せている。私は慢性化した恐ろしさで、くるりと向きを変えて家に急ぎました。家に帰る途中、一人の友達に会い川へ釣りに行かないかと話しかけられましたが元来気の小さい私は警戒警報の最中、川へ行こうなどとは私の臆病心が許しませんでした。私は軽く首を横に振りました。彼との別れがその時が最後であったとは彼自身も知る由も無かったでしょう。後で分かったのですが、やはり川へ一人で行ったらしくそのまま行方不明だと変わり果てた彼の父から聞かされました。彼の父は戦争で左足を切断したとかで、いつも松葉杖を持って器用に飛び歩いているのをよく見かけました。今もなお私は彼を、そしてあの悲惨な姿を・・・目をそけたくなるような彼の父を忘れる事が出来ません。

彼の衣服は燃え落ち、皮膚は焦げ、左手は前にだらりと下げ、右手には一本の杖をしっかりと握っている。よく見ると杖は鉄棒で、握られた右手は鉄棒に溶けたようにくい込んでいる。おそらく燃えさかる火の中で自分の左足ともいえる杖を探し求めたに違いない。その時、彼の側にあった真っ赤に焼けた鉄棒を握ったに違いない。それをそのまま固く握りしめていたとは・・・。

彼は足をひきずり、杖にすがるようにして焼けただれた顔を上げ、目を光らして愛する我が子を探し求める。その目は戦争に対して何ものかを訴えているかのように思えてならなかった。

原爆が投下された時は警戒警報は解除されていて私達は校庭で朝礼を行っていました。校舎の中央にある時計台が八時十五分を指した時、私達の耳にあのB29の不気味な爆音が腹の底に響いた時、誰かが“光った”と大きな声で言った。私達はいっせいに指さす方に目を向けました。私達は何か銀色に光るものが落ちてくるのを見ることが出来ました。その瞬間私は赤、青、橙とも区別のつかないなんとも言いようのない火焔の光線を受けた時、私は恐ろしさのあまり思わず“母ちゃん”と声を出したか（手を出す間がなかった）胸に抱いたか、思わず全身に母を浮かべました。おそらく他の数百人の生徒達も私と同じように追いつめられたような気持ちになったに違いないと思います。同時に“モゥー”と熱い風が、巨大な熱の爆風が吹いてきた。その瞬間、私はいかにして逃げたか、その時の事を今となっては思い出すことが出来ません。自分が生きていることに気がついたときには私は土間の中で十数名の生徒達と砂ぼこりを吸い、落ちてくる瓦と倒れかかる壁や柱と闘っていました。私達は声を出すことも泣き叫ぶことも助けを求めることも出来ない恐怖と苦しみの中で、女の先生を見つけました。私達は皆、口々に「先生!」と叫び倒れかかる柱を払い分けて私達は先生にすがりつき始めて救われたような気持ちになりました。本当にこの時だけは泣くことがみんな出来たと思います。泣けたという一種の喜びさえ感じることが出来ました。しかし誰も話をする人はありません。それどころか息苦しくて泣くことが精一杯だったからです。息つく間もなく、またもや柱もろとも壁土が、私達がいる所へ不気味な音をたて倒れかかって来ました。私達は恐ろしさのために身動きも出来ず、ただ柱の下敷きになるのを待つばかりでした。その時先生は額から血を流し髪をざんばらにし眼はカッと開き、私達を払いのけ倒れかかって来る柱から逃れたが瞬時にして数名の生徒が、あっという間もなく下敷きになってしまった。

彼らは助けを求めることさえ出来ず只苦しそうにうめき声を立てていました。私は奇蹟にも先生が払いのけたため難を逃れることが出来ました。助かった数名の生徒達は下敷きになった友達を救うことも出来ずただ私達は号泣するばかりでした。呼吸するにも困難な砂ぼこりの中で互いに顔を真っ黒にして泣きじゃくりました。押しつぶされ

た土間の中には先生の姿は見あたりません。この間の出来事は時間にして分からない程、瞬間のことでした。辺りは幾分静まったがまだ壁の落ちる音、不気味な音を立てて倒れてゆく柱、静けさの中にもまだ危険は去っていませんでした。折り重なった柱の中から空を握っている白い腕が見えます。指先から血がしたたり落ちています。私達はどうすることも出来ず只じっと見ている他はありませんでした。私達はその時、全ての過去を思い出すことが出来ず、ただ今起こった事さえ、今見たその一つ一つさえ次から次へと去っていったのです。私達は一切の記憶が不可逆の状態に追いやられたのです。一人立ち、二人立ちして泣きながら出て行きます。泣き叫びながら両手をだらりと下げて出て行く生徒達はみんな口を半ば開け、足を引きずって放心したようにただかすかなうめきに似た声を発しながら夢遊病者のごとく歩いて行きます。誰も口をきくものはありません。いや話すことも出来ないのです。そのはずです。私達はどこの誰よりも世界で始めてあの大きなショックを受けたのです。

私達は誰言うともなく校庭の芋畑にうずくまりました。私達は何も分かりません。ただ号泣するばかりです。そうした中にあってみんな今の瞬間を思い出そうとしてあせっています。今ここになぜこうしているのかさえ分かりません。眼に写るもの、耳に入るものさえ全く感じられません。しかしはっきりと呼ぶことが出来た言葉がありました。それは「おカァチャン」と母を呼ぶ声でした。みんな狂ったように「おカァチャン」「おカァチャン」と呼ぶのでした。泣き叫ぶ声は胸をえぐるような悲壮な騒音のリズムとして美しい歌にさえ聞こえます。その美しい歌は歌い続けられました。今思い出すならその時の歌はまさしく戦争を憎しみ、そして平和を招く歌だったのです。それなのにその歌は十年後の今日に到るまで歌い続けられて来たのでしょうか。私は望みます。平和を求む歌は永久に消える事なく歌い続けられんことを・・・・。私達は止むる事なく歌い続けなければなりません。

その時平和の歌をかき消すものすごい爆音が・・・・私は思わず地に伏せました。同時にあっという間にグラマンが頭上低く飛び去って行きます。私達は歯を食いしばり両手に土をギュッと握りしめていました。私達はこの時、急に恐ろしさをおぼえさせられました。私達は気づきました。コワカッタ、そして今、何ものにもすがることの出来ないコワサ、私は今の今まで何が起こっていたか、どんなになってしまっていたか全く気づかず恐い事さえ忘れていたのです。いや私自身がどんな姿になっていたかさえ気づかなかったのです。

私は急に激痛を感じたとき、私の衣服は真っ赤に血に染まっているではありませんか。流れる血は止まる事を知らず、にぶく光って吹き出てきます。左腕は肉を深くえぐられていて骨さえ見ることが出来ます。口からも血が出てきます。今まで唾とばかり思っていたのが血であったとは・・・・。足にはガラスが突き刺さり歩くのにずいぶん痛みを感じます。一歩進むたびに貧血と痛さのために今にも気が遠くなりそうでした。校舎に眼を向けると45度に傾き今にも倒れかかっているではありませんか、いやそればかりではありません。屋根は全部飛び、無惨にも朝礼をしていた生徒達の頭上に落下しているではありませんか。落ちた屋根は無情にも多くの生命を奪っていました。瓦にはまだ乾いていない血が不気味に光っています。白い手はみんな開いていて材木の間から見られます。この様は一生忘れる事が出来ません。

“忘れられない 忘れてはならない”

その二

私は、ただ呆然と恐怖のまなざしで辺りを見渡す他はなかった。私達は成す事を知らなかった。右往左往する、その姿は恰も恐怖の一瞬の為に童心を破壊された鬼の姿であった。その鬼と化した私達が泣き叫び、苦しさの余り、もだえ叫ぶその姿を誰に訴えたらよいのか分かる筈が無かった。救われる事を待てど、誰一人として手を貸してくれる者もいなかった。その内に一人、二人と、母を呼び続けながら、苦しみを忘れていくものがあった。彼らの苦しみを救ってくれたのは、天子唯一人であった。

物凄い爆風の為か、水道管が、地道に地割れと、ともに数メートル、

突き出ていて破裂した管からは勢いを失った水が、流れ出ていた。私は、水を見るや急に咽が乾いているのに気づき、はうようにして水に近づいて行った。そこには、もう数人の生徒が、水を飲み傷を洗っていた。流れ広まっていく水は、勿論、赤味を帯びていた。水を含み終わって、ふと傷を見ると、何と傷口は腫れ上がり、血は黒く固まり所々、まだ血が吹き出ていた。私は、余りの恐ろしさに傷口をさはるのさえたじろぎその場を離れていった。

私は、ガラスの立っている足を一歩一歩と引きずりながら又、はうようにして校門へと近づいて行った。その校門のそばには、家へ、そして母の許へ一刻も早く帰りたかったのでありましょう。沢山の生徒が群り出て行く姿が見られた。

だが、その内に、ある生徒は、力尽きて重なり合って倒れていく姿が見られた。けれども助け起こす気力は誰にも無かった。その有様は幼きものの地獄絵図であった。

私は、幾度か倒れ、はうようにしてなおも一歩一歩と家に向かって急いだ。途中、家はことごとく破壊され元のままの家は全く無く全滅の極みを超えていた。ある破壊された家からは助けを求める絶叫さえ聞こえて来る。だが誰も行ってやる様子も無かった。ある所では押しつぶされた家から聞こえる幼な児の絶叫に頭髪をざんばらにした女はまったく衣服をまとわず、全身血に染めて押しつぶされた家の木々を死にもの狂いで払い除けている姿さえ見られた。その哀れな女を誰しも見た。けれど誰一人として助けの手を貸す者は無かった。それもそのはず一人として無傷の者はいなかった。誰しも助けを求めたかった。そして助かりたかったのである。全く人道仁徳に反した無感の動物にしか他ならなかった。　形の無くなった家から火の手の上がるのが、所々に見られた。破壊された家、そして、助けを求めて細叫する人までも火魔はメラメラと不気味に覆いかぶさっていた。幸か不幸かつぶされなかった裏庭の鶏舎には卵を生んだらしい雌鳥が歓喜の叫びを発していた。雄鳥は満足気に餌を探していた。その幸な一家にも火魔はようしゃなく、広まっていった。

一歩進むにつれて被害の程が大になって来た。私は、何か一層悪い予感がして来た。そしてなほも足を手を早めた。街路樹の楓の木は爆風に吹き飛ばされて一枚の葉も残していなかった。今の今まで咲き揃っていた向日葵の花は一ツ一ツの花弁と成って荒れはてた辺り一面に黄色く美しく散り染めていた。一枚の花弁は道で、もがき苦しんだ幼児の額にもふりかかっていた。やがて花弁は幽霊の様を成した避難者の群に踏みにじられ赤く血に染まっていた。まさしくその惨憺たる光景は此の世にあるまじき恐怖の極みであり二度と振り返って見れる物ではなかった。

着物は燃え落ち手や顔や胸は腫れ、紫色の水膨れは、やがて破れて皮膚はぼろの様に垂れ下がっている。焼けた衣服は点々と肉に附着しているのさえ見られる。手は半ばあげ皮をだらりとさげていた。

生きているものの本能のわびしさで、傷ついた者達がなんとなく群衆と成って一大行列を成したのであろう。その幽霊の列はどこえ行くのだろう?しかし考える力を失った人々は、安全な所は、自分達の行くべき所はどこなのか?今だかって経験しなかった大きな衝撃、何が落ちて来たのか?何も知らず、そして知らされぬまま不帰客とならなければならぬのは、死に切れないと何者かに訴えているかの様だ・・・・・・。人はやがて力つき人の上に重なり、重なり合って死んでいったのでありました。

幽霊の列とは逆に私は被害の大きい街え、そして、火の海へと進んでいった。家に近づく、母の許に近づく、しかし被害はますます大きく無惨になっていく。電柱は倒れ油は道に広まり火の海と化していた。

高い火の見櫓の上で黒こげに成って死んでいるのが見える。想像もつかぬ程苦しかった事だろう。下は火の海逃げるに、のがれられぬ様、まさに「罪なき火あぶり」だ。誰がやったのか誰が、そうさしたのか、・・・・・・彼は最後迄絶叫したであろう。

私は、朝見送ってくれた母の許にやっとの思いで辿りつく事が出来た。しかし、家はなかった。見慣れた物は何一ツ無かった。辺りはまだもえきらぬ物が白い煙りを出して、くすぶっていた。

私は泣きじゃくりながら、遠くから近く足許に、足許から遠くに目を何

度もうつした、が母の姿を呼びぐったりとうずくまって動かなかった。
（つづく）
（昭和三十年十月二十日記）

“忘れられない 忘れてはならない”
その三

「おかあーちゃん」「おかあーちゃん」私は声の限り呼んでみた。けれども熱気と天を突く黒煙の街の中、そして白煙の焼野原の中からは母の声が聞こえるはずがなかった。鼻をついて気が遠くなりそうな悪臭と、息苦しくて眼にしみる煙の中で悲しみのあまり唯唖然と蹲っている他なかった。

恐怖と苦痛、そして何ものもない思考、そしてこれ以上形容しがたい悲しい心を抱いてから来なん時たったか知らない。私は九死に一生を得た幽霊の群れの中にいつしか揉まれていた。何処へ行くのか知らない、唯たくさんの人達いや唯同じ身の幽霊の行列の中に居たかった。“幽霊の行列”着物は燃え落ち、体はふくれ上り、やがてその紫色の水ぶくれは破れて皮膚はたれ下り、手を半ば上げて「イタイョ」「イタイョ」と群がり歩いているのでした。そしてはじめて互いの無残な姿を発見し合うのでした。

人々は驚き気を落とし、力を尽かして倒れてゆくのでした。彼等は永遠に起き上がる事を忘れていくのでした。何を落としたのか、誰がこんな姿にしたのかと最後まで叫びながら神に救われていったのです。やがていきづまった屍の山に、そして私達の群に息もつけぬ程の臭が一陣の風と共に流れ渡った。と同時に黒い雨が墨の滝の様に、きたない油の滝の様にザァザァと降りそゝいだのでありました。私の腕の傷ははれ上がり一層痛みを増していった。苦しみ、もがき廻ったあげく私は唯一人屍の山に残され、全てを忘れ倒れてしまった。

私は聞きなれた声を耳の奥深くに聞いた。誰かが私の名を呼んでいる。誰かが一生懸命狂った様に私の名を絶叫している。私は天国への階段に足をかけていたのをその絶叫する声に呼びもどされた。私は細く目を開いた。辺りは薄暗く生ぐさい風が吹いていた。私は夕もやの中に母の顔を見つけた。母の目に涙が光った。私は嬉しかった。言うまでもなく私は母の胸に顔を埋めて泣いた。そして皆な無事で会えた事を戦地の父に感謝した。（終戦後六ヶ月して分かったのだが、その時はもう父は南方で戦死していた）

妹の頭には一寸五分程の深い切り傷があった。傷に当てた手拭が真紅に染まっていた。すでに辺りは全く闇に覆われていた。その暗闇に母の腕に、足に五寸釘で刳られた三日月型の傷が見られた。何かきれをあてゝいるが血の為にどす黒くなり闇の中で不気味に光っていた。私は恐怖の中にも安心した気持ちで母の膝許に横になった。

七つの美しい川も美しい山も、そして住みなれた私達の広島の町は一瞬にして廃虚と化したのです。後に残されたのは焼野原です。人間が造った“死の砂漠”です。その死の砂漠の中には私達の同胞日本人が二十七万も消えていったのです。何事も無かったかの様に空には星が輝いた。広島の夜空は二十七万の星を加えて一層冷たく寂しく輝いていた。夜が明けてみると辺りの荒れ方の酷いのに一層驚きの目を見張った。何でも男か、女か判断しにくい死体が点々と散乱しているのには目を蔽わずにはいられなかった。私達は昼近くまで救われる事を知らず唯じっとしている他はなかった。やがて陸軍のトラックが例のカタパンを一袋ずつ投げて走り去った。私は水もなしでかじりついた。しかし無駄だった。咽喉を通らなかった。辺りの人達も手をつけそうになかった。みんな真夏の太陽をじりくと受けている他はどうするすべもなかった。その為に火傷の人は一層苦しみもがいた。動けば水ぶくれが破れ赤身を出した。が太陽はようしゃなくやきついた。直射を避けることも出来ずそのまゝ一人、二人と死んでいった。

やがて私達は救われた。私達を探しもとめて叔父が呉よりやって来たのです。叔父の手には三つの箱と白い箸を持っていた。叔父は当然私達が死んだものと思い骨箱の用意をして来たのである。私達はからくも小さい箱に入らずに済んだ。思えば、あの小さい箱にはぞっとさせられる。叔父に手を引かれて、よろめきながら三キロ近く歩かされた。

その途中が又何とも表現出来な

い凄いものであった。今だに床に入った時ふと当時を思い出すと思わず蒲団を被って小さくなる事がしばしばある。私は目を閉じて息をころして歩いたものである。道路の両端には黒焦の死体、ぶくぶくに脹れ上がった死体がずうーっと続いているではないか、中には子供も女学生もいた。まだそうして分るのは良い方で全く男か女か分らないのが多かった。用水槽の中では数人の男女が水だきにされて死んでいた。その脹れ上がった死体を一人一人丁寧にしらべている将校が見られた。彼の母か、あるいは妻を捜しているのであろう。中には黒こげの小さい死体に抱きついて泣きわめいている女もいた。黒こげの死体が半焦の小さい死体を抱いているのもあった。牛馬は体の倍に脹れ上がったまゝ横たわり、中には腹の破裂しているのさえ見られた。七つの川には材木が浮いているのかと思われる程死体が流れていた。市電は鉄骨だけを残している中には数知れない人が真黒になって重なり合っていた。

私達の様に逃れて行く生きている人間は全く少なかった。それだけに犠牲者に後髪を引かれる思いがした。私達は死の山、死の砂漠し冥福を祈りつゝトラックの人となって呉へと逃れた。

まだぬけ切らない恐怖心と、黒焦の死体の臭を持ったまゝ十数日を過ごした。近所に避難して来た無傷の元気な人が頭髪を一本も残さずして血を吐いてつぎつぎと死んで行ったのもその頃だった。私達一家の恐怖心は一層倍加した。幸い頭髪は少しで済んだが、手足の薄い毛はことごとく脱けてしまった。小さい擦り傷でも全快に三ヶ月は要した。それればかりではない。如何なる薬を用いても効き目は一向になかった。

あの時の事を一時も忘れることなく十年という年月を過ごした。いつやって来るかもしれない原爆症に脅かされながら…　現に十年を経た今日の新聞にまでよく原爆症に殺された記事が見られる。私達被爆者の恐怖心はまだく絶える事を知らず続くことだろう。

私達の恐怖心へ慰めの何ものもない、そればかりか日本の国を挟んで西と東で絶え間なく不気味な閃光、そして汚染が重ねられていっている。『生き物の記録』が上映されたが、現代の人間が狂人になるのも無理からぬ事である。私達被爆者こそ極狂人である。その極狂人がサ七万の犠牲者に永遠の冥福を祈りつゝ全世界の平和を願うものである。

（おわり）―昭和三十年十二月六日記―

証言集・平成十四年版

これから掲載する証言集は、平成十三年の集いの後に新聞記事をご覧になって寄せられたものです。

吉川金章さん

大阪市生野区在住。当時は旧制桃山中学在学、教室で体験。

前略、朝日新聞八月十二日付朝刊の記事読ませて戴きました。その時の事ははっきり覚えております。

小生、昭和五年（１９３０年）生まれ、当時旧制中学生で、学校は旧桃山中学（現桃山学院）。校舎は戦災で焼失し、近くの阿倍野小学校での仮住まいでした。丁度動員が休みで二階の教室で授業のまねごとの様なものがあり、生徒も二十人位だったと思います。午前十時頃だったと思います。警戒警報が発令されましたが、大丈夫と授業が続けられていました。Ｂ２９一機が飛来しました。どうせ偵察だろうと思っていると、急に「ゴーッ」という投下音と共に、大爆発音がしました。窓の外の東の方に黒煙が立ち上がっていました。皆「大びっくり」「大あわて」。授業は中止、すぐに下校しました。

当時阪南町四丁目に住んでいました。家に帰ると、田辺に爆弾が落ちたと聞き、急いで行きましたが、法楽寺付近より東へは立入禁止でした。商店の閉まった田辺商店街の親戚の家も家族が疎開し、残った伯父にも会えず帰宅致しました。

日がたつにつれ、死者、けが人、家が吹きとんだ話が伝わってきました。しかし正式な報道はなかったようです。焼野原の街、食料難、何を考えて生きていたのか、思い出せません。ツライ時代でした。その後しばらく田辺小学校の北の空地には大きな穴が残っていまし

た。慰霊の碑、貴重な資料となり、戦争体験を後世の人に伝えたいものです。打ち上げ花火を見ても、昭和二十年三月十三日焼夷弾をふと思い出すことがあります。

記事を拝読し、一つの思い出を書かせて送らせて戴きます。

平部章子さん

当時十八歳、田辺三丁目の自宅で体験。和泉市山荘町在住。

「模擬原爆のつめ跡、大阪にも」の朝日新聞二〇〇一年八月十一日の記事を見て、私は初めてあれが模擬原爆だったことを知りました。

忘れもしません。私当時十八才、母四十才は田辺本町五丁目（現田辺三丁目）の今も残る佐藤眼科と吉田内科医院の筋向かいの四軒長屋に住んでいました。その日の朝も早くから空襲警報が鳴りわたり、私共は連日の空襲に疲れはてて目をさましたものの、二人顔を見合わせて「どないしょう」とかやの中に居たのでした。父は上海へ出稼ぎに行って留守。上の弟十六才は江田島の海軍兵学校に入隊。下の弟九才は母の田舎に預けていました。母と二人、又、壕の中に入るのがめんどうなのと、B29は通りすぎるだろうとたかをくくっていたのでした。が！その朝はちがいました。急にヒュルヒュルヒュルといつもとはちがう音が耳もとでしたので、私はとっさに「近くに落ちる音や！」と母にどなり、防空頭巾をかぶる間もなく「ドーン」と地面が三十センチ程も飛び上がり、私達は投げだされました。でもまだ家の中だったのです。二人はしっかり抱き合ってふるえが止まらず、今にも家がこわれてくるかと思ったのですが、あのすごい振動の中、家はこけませんでしたが、家財道具がそこら中に散らばっていました。五丁目は丁度爆風のかげに入ったらしく、二階のガラス戸はこっぱみじんに吹き抜けてこわれましたが、四軒長屋は互いに支え合っていたのでしょうか、家そのものは立っていたのです。当時ガラス戸には紙を斜め縦横にはっていたのに、あのすごい爆風で粉々にわれてとび散っていました。瓦もわれて落ちたことと思います。

私達はとにかく生き残ってほっとしました。私はこわくて爆心地を見に行く勇気はありませんでしたが、何人もの犠牲者の方がおられたことは聞きました。一丁目の海野修さんと下の弟とは同級生だったので「海野君大変やったんやなー」と新聞の記事の話を聞いて、「生きててよかった」と言っております。下の弟は疎開先から帰った時、見に行ったらすごいことになっていたと話してくれました。

もう戦後五十六年もたって、大阪の焼ける空を眺め、五丁目にも焼夷弾がバラバラ落ちてきました、吉田内科の家の中に落ちて火をふいている所に、ぬれむしろを引きずるようにして持って走った時のことをは忘れません。むしろは乾いている時は軽いのですが、用水漕の水をふくむとすごい重さになるので、十八才の若さの力のある私でもひきずるのがやっとでした。もっとも食糧の乏しい時でしたから、お腹はすいていたと思います。後から吉田内科の先生は深々と頭を下げて「お宅のお嬢さんがかけつけてくださったお陰で、火の勢いが落ち家が焼けずにすんだのです」とおっしゃって下さいました。無我夢中だった私はきっと火事場の馬鹿力が出たのでしょう。

模擬爆弾の話しがそれて申しわけありません。私は現在、脚腰の傷害者となり慰霊碑にお参りに行けませんが、和泉の地から田辺の方へ向かって尊い犠牲になられた方々のご冥福を祈らせていただきます。

垣村照子さん

当時主婦、爆心地間近にあった。田辺の姑の家が全壊。堺市野尻町在住。

田辺の模擬原爆と終戦前夜の想い出、今、書いておかねば・・・

はじめに

先日の「模擬原爆の爪跡」証言の私の記録が遅くなりました。私はとかく忘れられない事で、五年

以上も前から子供や孫達に伝えておきたいと思って書いておいたものです。つたないものですがこまかいことなど長くなりますので別紙同封してお届けさせていただきます。

私は大正十三年京都に生まれ、昭和十七年京都の高等女学校を卒業しました。昭和十六年に太平洋戦争が勃発し、日本の国中を一変させ、軍需産業の優先で軍事色一色となり、日常生活は日々窮屈になっていくばかりでした。私は国のために直接役に立つ仕事をしたいと思っていた矢先、三重県に鈴鹿海軍工廠が新設されるからと人員募集があり、徴用工、挺身隊の工員さん達と寄宿生活をともにし十八年と十九年の二年あまりを事務系の仕事をしていました。

昭和二十年一月に東部禁闕部隊（近衛工兵陸軍少尉）の現在の主人垣村と結婚することになり、二月末に鈴鹿海軍工廠を退職した私は京都の実家へ帰り、四月二日に梨木神社（京都御所内）で神前で結婚式を挙げました。その翌日に主人垣村は急ぎ原隊に戻ってゆき、私は京都で主人からの連絡を待っていました。

一方、昭和十九年十一月頃から、アメリカは日本の主要大都市へ空襲作戦を開始し警戒警報や空襲警報は日増しに多くなり二十年三月十日の東京の大空襲を手始めに編隊を組んでは飛来して焼夷弾を投下し、三月十三日六月十五日の大阪大空襲では堺の方にも大きな被害を受けたと聞いています。

主人の実家は大阪市東住吉区田辺本町二十六番地にあって当時六十一歳になる姑さんが家を守っていて戦局が激しくなるに従い食糧事情も益々きびしいものとなり何時警戒警報や空襲警報が発令されるかわからない不安と危険と緊張の最中に田辺に住む姑さんのことが案じられ、姑さんの家と京都の私の母の住んでいる家両方へ豆類、野菜類、芋など何でも買い出しに行き両方の家に運んでいました。

そのような生活を続けて毎日過ごしているうち七月の何日か覚えていませんが京都から新京阪電車（当時）を乗り継ぎようやく大阪へ着き、今度は平野線で田辺駅で下車したとき、あたり一面何かで破壊されたように荒れて駅に近い主人の実家の前に来たとき声も出ないほど驚きました。

その時や前後のことなどは別紙にしました。（時間がある時に思うままに反古に記していたものです）。毎年八月お盆の時期になりますと強く思い出し、いくら戦争のためだといっても、このような事実があったことは忘れることが出来ません。私ども二人大正八年、同十三年生まれの者は中学生位から戦中、戦後の苦しい時代を乗り越え、子供（男二人、女一人）三人現在無事にしておりますが親―戚の人たちはだんだんに減り、大正生まれの友だちも少なくなってゆくこのごろです。

千葉県柏の地から帰り、その後の日常生活のこと

昭和十九年十月、垣村は近衛工兵として皇居を守る隊に勤務していた。翌年四月結婚の後、主人垣村は千葉県柏に転属し、柏の下宿先での結婚生活は二か月あまりであった。戦局は益々激しくなり、主人は近衛部隊を守る精鋭部隊として再び埼玉県の上尾に移動を命ぜられたので私は一人柏の地に残ることは出来ないので京都へ帰ろうと思ったが京都市内にある私の実家も道路拡張のため疎開で家は無くなり一応母の居る叔父の家に落ち着くことに決めた。叔父の家族は東京で空襲に会い京都へ来たもので、家族五人の上に実母と私が加わり、大家族で食料事情が悪い中、配給だけで足りず、一方大阪の主人の実家も京都以上に警戒警報、空襲警報の発令も多い上、食料不足も京都以上で私は大阪と京都を行ったり戻ったりして通い続けては食料の買い出しを役目として働いた。

昭和二十年六月になった。京都は未だ焼夷弾は一度も落とされていないものの、お米の配給など、米以外にコーリャン、とうもろこし、乾燥押し大豆等、じゃがいも、さつまいも、メリケン粉などはいずれも一日分の米配給量、二合三勺（女）の分から差し引いた分の配給で、お米はその分少ない。魚もたら、えい、金魚のような赤い魚などで食べる気のしないものの配給である。白菜、キャベツ、大根でも少しの切り売りに早くから

並んで配給してもらうが一食のおかずにも足りない量で日に日に八百屋の店先に並ぶ品が何もなくなってゆく。そのように乏しい食事情でも警戒警報のサイレンが鳴ると少しのお米を炊きおにぎりにして非常袋に水やカンパンなどとともに入れ、防空ずきん（綿入り）を首筋にぶら下げ、家の中に作った防空壕に避難することが度々あった。

大阪の田辺にある主人の実家の事も、日々心配になり、これから先どこに居ても、何時爆弾でやられるかわからない。姑さん一人ではどうする事も出来ないだろうから田辺へ行って、雨のかからない縁先の庭に少しの台所用品や日持ちのするこんぶ、わかめ、梅干しなどを小瓶につめ、それらを一斗缶に入れ土下五十センチ位掘って入れ、もう一つは瀬戸物の大きい火鉢に茶碗、小鍋、包丁など最小限つめて二カ所に埋めるために京都から大阪の家へと警報を気にしつつ埋めに行くことでその場しのぎの安心をしていた。

京都大阪間での買い出しのこと

京都から大阪へ通うのは、京都四条大宮から梅田行き新京阪電車（現在の阪急電車）に乗り、梅田から地下鉄で天王寺に行く。その車中からなるべく停留所近くに畑が広がっているようなところを見つけ途中下車し百姓さんをみつけて、玉ねぎ、なす、キャベツ、瓜、ナンキンなど、たとえ主食の足しにならない物でも売ってもらえば有り難い方で、ヤミの値段を出しても買い田辺の姑さんへ持っていった。京都への帰りがけには同様の事をするが、二度同じ百姓さんへは行けないし、また新しい駅を見つけて下車してまだいっていない農家をあちこち尋ね歩いて買い回る。

当時店頭には品切れの縫い糸、針、ゴム紐、ホック等を持ってゆくと喜ばれ、何かのものをヤミの値段ではあるけれども分けてもらえるし、切符の必要な配給品の砂糖、油、石けん、煙草等は自分の家では使わずに残して置いて持ってゆき。メリケン粉、いも類等をヤミ値で売ってもらえるから二、三日安心できるのである。けれども大阪は京都よりもっと物資が不足しているし、ヤミ値も上昇する一方。姑さんは思い切って自分が長い間大切に残してきた自分の夫の毛織りラクダのシャツ、パッチ、木綿地の上衣、その上、私の主人の中学校時分の剣道着、純綿の靴下等を出してもらい、百姓さんから頼まれた品物を持っていくと沢山に分けてもらえるから私が次回大阪へ行った時にといろいろ捜し出してくれて、私は京都、大阪間をせっせと往復して運んで食べることに一生懸命になっていた。私の嫁入りにと母が切符を都合して作ってくれていたちりめんの晴れ着やお召し（絹物）めいせんの着物、羽織類はどこでもいらないと断れるばかりだった。

新京阪、地下鉄のこと

七月に入り、京都にも益々警戒警報が頻繁に発令されるようになってきたが、買い出しはどうしても行かねばならないから相変わらず、新京阪に乗って大阪へとゆく途中、警戒警報のサイレンが鳴り続いて空襲警報になって電車は停車し、明かりを消し立ち往生してしまった。

車内は真っ暗がりで窓の外を見すかしての両側は何にもなくなって焼けてしまっている。鈴鹿工廠にいた頃、名古屋の空襲を見たとき、また千葉県から東京空襲を見たときに聞いたことで、焼夷弾が落とされる時は目的の場所より早く投下しているから飛行機B29が頭上に来たときは投下した後でかえって安心してよいとのことだった。田辺の姑さんのいる家の方はどうだったかと、心配しながら空襲警報解除のサイレンをじっと車中座席で待っている。十三駅あたり一帯は爆撃にあって沿線の人家は焼夷弾で焼け尽くされ夕方であったから次第に夜遅くなっていく。暗がりのあちらこちらでは下火になったといっても残り火が気味悪く、思い出したようにポッ、ポッと小さい炎を出している。ようやく電車は動き始め梅田に着いたが、今度は地下鉄が天王寺までしか行かず、乗客は仕方なく暗がり道を歩き出し、私も同じように皆について南の方向に向け歩くことにし夜の道を歩いた。私は重い

野菜類の荷物を持ち、歩く夜道の中途で、中年位の女の人が「荷物を持ってあげましょう」と話しけてきた。けれども以前京都で、私の実兄が戦地マニラから内地の病院へ帰ってきたときの話で、大津の病院に入っている兄に私服を届けてあげようと家に来た男の人に母は喜んで兄の背広を渡したがだまされていたということが後で分かった話を思い出し、怖かったから断って早足で進み歩いた。田辺の姑さんの家にたどり着いた時は夜も大分遅くなっていた。姑さんはその時無事で安心したが私が夜遅くに行ったので驚かれて今あった様子を詳しく話した。その後も京都、大阪と度々ヤミ食糧を運んだ。

田辺本町の家の災難

次回大阪へ行った日は覚えていないが梅田から地下鉄で動物園前で下車し平野線に乗り換えた。なんとその日は警報が出ないうちに、ようやく田辺駅に着き下車はしたが、この前来たときとはあまりにあたりが違っていてむちゃくちゃになり駅からは本当に近い垣村の家の前に来て、これは一体どうなったのかと声も出ない程であった。田辺の垣村の家は瓦の屋根が全部吹き飛んでしまって何もない。家の中は柱骨だけがそのまま残り、ふすまは飛ばされ紙はぼろぼろに裂け、縁側にあった障子ガラス戸は倒れているのや吹き飛ばされたのやらで家の中はがらんとしている。ガラスには太い紙テープが張り回してあったのに粉々に破れて散乱し、たんすの上に置かれていたのではと思えるすべてのものがあちらこちらと吹き飛ばされ、壊れている。柱時計は飛んで落ちたかと思える程向こうの方へ飛び落ち、家中、壁土と砂埃が平屋建ての部屋の全部の畳一面に十センチ以上も積もって履き物を履かないと歩けない状態だ。姑さんは外出用草履をはき、頭には手拭いを「あねさんかぶり」にして、片付けようともしないでウロウロしているばかり。座るところさえなくあまりの有様に、私は玄関先に立ちつくしてしまった。ただ姑さんはさる3月に亡くなった自分の夫のお骨壺袋だけをあっちへやったりこちらへ持ってきたり、ちょっと高いところへ置いたりしていた。私は京都から来たばかりでどうしたら良いかわからない。少し経って落ち着き驚いてばかりいてもどうにもならない。すぐ片付けないと、と思い返したが何から手をつけてよいやら・・・で。

けれども座ることも出来ないから、先ず畳の上の壁土を取り除き、夜寝られるようにすることが先だと、二人して十センチ以上貯まっている土砂を掃くことは、とうてい出来ないので少しづつをちりとりですくって外へ出した。畳の上をすくっていくのは時間がかかり、夜になるまでにちょっとでも多く取って座れるようにしなければ、と休むことも出来なかった。幸いなことにはたんすやお仏壇が倒れなかったことであった。

爆弾で全壊した家での生活

近所の人の話では、この家の北の方にある「金剛荘」辺りへアメリカの飛行機が一トン爆弾を落としてゆき、その爆風でやられ「金剛荘」のところは大きなすり鉢型の穴があいているといっていた。その時の私は目の前の家がひどいことになっているのが心配で、何も考えられないで、姑さんにその時どうしていたかを聞くことさえも気がつかないで、片付けるのに一生懸命になり大分あとでやっとけが一つしないで元気で本当に良く助かったと何度も有り難く思った。

昼食を食べる時間は大分過ぎていた。しかし家の中にある井戸は横の棚の塩壺や瀬戸物の鉢など一杯はまって使えないし、お隣の家もお向かいの家も軒並みに被害を受けているから水が全くない。やっと田辺駅近くの倒れた家跡に、むき出しの水道栓を見つけ少し出ている水を汲んできて炊事に使った。掃除や洗濯にはとてももったいなくて使えない。食事こしらえといっても燃料のたきつけもままならない中、お釜で少しの米に配給の押し大豆、赤い粒のコーリャンなど混ぜ物の方が多いご飯を炊いて、お腹を満たしていた。お芋類の配給もなかなか入らず。燃料のたきつけは爆風で壊された家の跡の木っ端（へぎの類）を拾って

きて、紙屑とともに燃やし明日はどうしようと考える乏しい日をくり返していた。日暮れて屋根なしの家は真夏最中の雲天井の夜の毎日。残っている柱の４つの角の上方に釘を打ち、それに蚊帳の吊り手をひっかけて蚊帳をつる。明かりも点けず、その中で夕食もし寝た。

姑さんは三月二十日亡くなった夫のお骨袋を自分のそばの目立つところへ置き、その前へは五年以上も前に中支方面へ出征した長男さんとの二組の陰膳は（代用食のお米だけ）欠かさずにお供し私達もその中で寝起きした。夜が明けるとともに起き出し、蚊帳の片側だけを外し今日の分の炊きつけ拾いと、出の悪い水くみに休む暇もなく爆風で受けた災難の後始末ばかりしていた。夜でも当時は空襲から守るため明かりは出来るだけ点けなかった。夕暮れには手製の代用ローソクで我慢した。この代用ローソクは「不易のり（手工用）の小さな広口瓶（直径四センチくらい）に白蝋を溶かし入れ、固まらないうちに当時小包などをくくる芋麻の紐を表面に少し（五ミリメートル）出して固めた先へ火を点けて燈とした。

爆風で七月に家が壊れて以来、未だに雨一日も降らないことは屋根がない家にとって神の助けのように思えた。しかし警戒警報は度々発令されて今日はどこへ飛行機が来るのかと、びくびくしながらその日の生活に追われていた。

終戦を告げるラジオ放送

昭和二十年八月十五日晴れた日の午前のこと、朝から良いお天気でお盆に入り垣村の姑さんは警報の出ないうちにどこまで行けるかわからないけど（東住吉区田辺本町四丁目に在住）自分の夫が三月二十日の彼岸に亡くなり初盆だからと天王寺の一心寺にあるお墓へ参ると近所でお墓の花を分けてもらい出かけていった。そのあと留守番の私は、まだまだ砂埃をかぶった家具も多く、その他の品々をまとめている最中のお昼前、姑が「今、阿倍野斎場まで行ったけど、あたりの人が本日の正午に重大な発表がラジオで放送されるから外出している人は皆、家に帰って聞くように言われ急いで帰ってきた。」今日は朝から警報は一度も出ていない。お昼頃には姑さんも帰って来られるから何を食べようか配給の六分の一に切ったナンキンでも蒸してすまそうかと思っていたときだ。一体何のことかしらと思いながらすぐにラジオのスイッチをつけ音を大きくし姑さんと一緒にラジオの前へ正座して待った。正午の知らせで私達は一心にラジオに聞き入った。天皇陛下の（昭和天皇）の低い玉音を耳にしたときはもったいない思いが一杯で何のことかわからなかった。じーっと終わるまで気を張って聞いていたがラジオ放送は終わった。しばらくぼんやり座ったままどれくらい経ったか覚えもない。

やっと大戦争は終わった。そして日本が負けた。私は今までに考えたこともないことで、今日まで苦しい食糧事情に耐えてきた。アメリカ軍から広島や長崎へ原子爆弾が落とされたことで、これ以上戦い続けても日本の国はますます焦土化するばかりだと天皇陛下のお考えからこの日（八月十五日）の結果となった。ということであった。ラジオ放送は東京二重橋前の様子ばかり放送しつづけていた。姑さんと私はお昼食を食べることも忘れていたがようやく落ち着き「アッーお母さん戦争は負けたけれど終わったのです。どんなに生活が苦しくなっても耐えて我慢して勝つことを信じていたのにー。けれども負けたことは全部が終わりになって埼玉県にまだいると思っている主人垣村も中支方面に長い間出征している長兄さんもやがては大阪へ帰ってきやはるのだから負けたことはかえってよかったと思いますよ。よかった、よかったね。」と二人して手をにぎりあった。すぐに配給のナンキンを蒸して昼食の代用にした。もうこれで焼夷弾が落とされ焼かれて火事も起きないし、Ｂ２９のいやな爆音の響きにおびえなくてもよく、安心して寝られると心の底から気が楽になった。しかし現在の垣村の家は屋根が飛ばされている状態で、明かりを点けることも出来ないし、水もなく雨が降ると困る。これからは新しい家を見つけて引っ越しをしなければならない。

終戦後の思い出

戦争は負けたことで終戦となった。その後垣村は屋根なし家で毎日の猛暑つづき、太陽が直に照りつけてくるし、日が暮れても何時までも暑い。井戸はまったく使えないので」水がなく、明かりもないから手製のローソクで代用し出来る限り夜分は蚊帳の中で過ごしていた。この家は到底元どおりに出来ないし、駅前の空き地に隣組で盛り土をしてゴマの苗を植えたり、ネギの根を残しておいて植えたりしたものの、大した食糧の足しにならず買い出しは止めることは出来ない。お隣さんも縁故を頼って引っ越して行かれ、垣村も何時までもここにいるわけにはいかないので私はしばらく後始末がつくまで、ここに泊まって毎日買い出しに行きながら次の新しい家を探さなければいけない。少しでも早く見つかるように、そして雨が降りませんようにと願いながら田辺の周辺を歩き回った。

平野方面まで買い出しに行ったおり、畑の中までも行って、メリケン粉やお芋類等、お腹の力になるような物を尋ねてみたが手に入らず、折角来たからには何か買って帰りたい一心で三、四軒以上尋ねた末に、マクワ（果物）なら売ってあげるといわれ当時四〇円も出してマクワを風呂敷一杯（十個以上）買って帰り、時間のことも考えず思うままに食べて満腹した思い出がある。垣村の家のあと片付けに何日かかったか覚えていないが日々買い出しに行った合間に一生懸命家探しをした結果、ようやく駒川町近くに二階家が見つかり幸いなことにも借りられることになった。終戦後あまり日の経っていない混乱の時ではあったが見つかれば早い方がよく、東大阪に住んでいる次兄さんにも手伝ってもらい大八車に荷物を積み、誰も男手がないので何回も何回も新しい家へ私も一緒になって往復して運び込みやっと引っ越しすることが出来た。主人はまだ隊の残務整理をしていたそうで帰阪の便りが届いたのは九月初の頃で、主人の荷物は一応私がいる京都へ届けることにした。

爆風の災難を受けていない駒川町の家ではすぐに電灯はつけられるし布団の上で安心して寝ることもでき、わずかの配給米や野菜類も一ヶ月ぶりで台所の流し台を前にし水道の水も使えて、明るい家で炊事が出来る喜びは何よりも嬉しいことであった。

噂話ではこの時期、いつか上陸してくるアメリカ兵は何をするかわからず夜八時以降、女性は外出をやめるように、ジープに乗せられ連れ去られるとか不安な情報が流れていた。大阪の垣村の家のことはひとまず落ち着いたので私は母のいる京都へ帰ることにした。

藤田典久さん

当時学徒動員、けがで休んでいた日、法楽寺西の自宅で体験。阿倍野区王子町在住。

「五六年経っても耳に残っている音」

「カラ・カラ・カラ」という感じに「サラ・サラ・サラ」という音が混じり「キュル・シュルキュオン」といった具合の乾いた音で、空気をかき廻わす感じの音というより大きな響きがせまってきたことは、今でも鮮やかに「音」の記憶として残っています。

「これは、焼夷弾や、近いゾー」と父や母、それに姉に声をかけ、家族が揃っていた居間から玄関に向かって駆け込んだのは、当時学徒動員で布施の工場にいた時、駅の北側の布施市長堂に爆弾が落ちたときの経験で、音による遠近を知ることが出来たからです。玄関は猫の額程の庭に向かっており、そこに手堀の防空壕があったので、取りあえずそこに逃げ込もうとしたのです。しかし玄関へ来た途端、猛烈な勢いで家が揺れ動き、襖や障子ガラスがハネ飛びました。倒れた入口のガラス戸を踏み越えて壕へ飛び込んで、振り返ると空はまっくろになり、ジャーという音と共に土砂が降って来ました。家族は土埃だらけで目玉ばかりギョロギョロさせて顔を見合わすばかりです。暫くして姉が「血ィヤ、痛い、イタイ」と泣き声をあげたので、フト見ると、ガラスを踏み抜いたのでしょう。足首から先が

真赤になっていました。
　私達がなんとか助かったのは、学徒動員で働いていた工場の旋盤の切りくずが指にささり「ひょうそ」になって化膿したので休みをもらって片腕をつっていたことと、爆弾の落ちたすぐ近くに法楽寺という大きな寺があり、そこの巨大な樟の木が直接爆風を防いでくれたからだと思っています。何しろ家は小さな畑をはさんではいるもののこの寺の西側にあったのですから。
　暫くして家に入って見ると、さっきまで居た居間は母の鏡台が木っ葉みじんにくだけ、頭の大きさ程の石ころが処せましと部屋中ごろごろしていました。更めて外から家を見ると、二階建の我が家は瓦はズリ落ち、傾いて無惨な姿をしており、空だけは元通りの青空に戻っていました。
　当時私たちは「一トン爆弾」が落ちたと言い合い「なんでこんなとこへ落としたんやろか」「あのなあ、間違ってスィッチを押したんや、ほんまはなア砲兵工廠に落とすハズやったんや」というのが通説になっていました。ともかくこの時から「一機で来るのが危ないねんでェ」が私達のチエになりましたが、その通り広島も長崎も一機できたものだったのはご承知のことです。
　ついでながらあの時の爆弾が「模擬原爆」だったとは、五十六年たった今、朝日新聞の記事で初めて知った次第です。
　そして記事の終わりに新たな証言を募っているということでしたので、あえて記憶に残っていることを書いてみました。拙ないものですが、ご一読頂ければ幸いです。

西本慶子さん
　八尾市東山本新町在住

「模擬原爆の記憶」
　２００１年８月１１日の朝刊（朝日）を見ていてびっくりしました。模擬原爆というものが落とされたことを、今、はじめて知ったのです。田辺という大阪市南部の古い静かな住宅地に落とされた爆弾が、このようなものであったとは、今更に戦争というものの無差別なむごさに憤りと悲しみがこみあげてくるのです。
　１９４５年７月２６日、その頃、私は二十一歳、母と二人暮らしの新米の女教師でした。金剛荘から少し西側の山坂町一丁目で、母が煙草屋を営んでいました。この時は既にその辺りの街は６月１５日の昼の空襲で半分は焼けて人々はちりじりに住まいを変えていました。我が家も焼夷弾の直撃で一瞬に焼け落ち、長年つみ重ねてきたものは灰のかたまりになりました。なすすべもなく茫然とした日々でしたが、いずれ皆々こうしたことになって、お国の為に死んでゆくのだと考えていました。私はまだ若かったが、母はもう５０代でしたから、さぞ気落ちしていたことでしょう。もう老舗になっていた木村煙草店への未練が、いつまでもまとわりついていたと思います。その上にこの７月２６日の被爆です。何ということでしょう。幸いなことに金剛荘との間は少し距離もあり、その一角に広大な庭園をもった大邸宅がありましたから、家そのものは倒れずにすんだものの、東に面した二階のガラス戸は木っ端微塵で、その破片がこまかく畳の上につきささって、陽の光に輝いていた様子は今も忘れられません。この家はさきの被災のあと、ほんの一角が焼け残った借家に一応身を寄せていたのでした。なぜ私たちだけが二度もこんな目にあうのと、情けなく思いました。近くには全く無傷で次の日からの暮らしに何の支障もない家が沢山残っていたのですから。そのガラスの破片の後片付けや金剛荘の爆弾あとの大穴を、恐る恐るのぞきにいったことなどをぼんやり思い出します。そこから北に少しはなれた所の焼け残った借家に漸く入ることが出来たのはそれからしばらくたってからのことでした。爆風をうけた家は、戦後きれいに修理されて今も健在です。
　もう長い間、山坂町の辺りへ行ったことはありません。桃ケ池公園のすぐ傍で、阪和線をはさんで東側のごく平凡な静かな住宅地、私は小学校の四年生から女学校、師範学校を出て赴任校の二校を過ごすまでここに住み、結婚もここから出発しました。目を閉じると走馬燈のようにあの頃のことが巡りますが、終戦直前のあの空襲で

の丸焼けと爆風によるガラスの破片は、心の中に鋭くつきささっています。私たち親子が一体何をしたというのでしょうか。無差別の惨虐行為の練習のために、ほんの街の片隅のささやかな親子の運命を大きく変えた模擬原爆、歯ぎしりをしたいようなこの口惜しさは、私たちにしか分からないのです。

あれからもう５０数年がすぎました。母は３０数年前に亡くなり、私も７７歳という齢になりました。あの７月２６日のことは戦争体験全体から言えば、ごく微々たることかも知れませんが、私個人としては自分の運命を変える忘れ得ぬ出来事なのです。日本国中にこのような人々が数えきれぬ程あったことでしょう。そして人々は命があっただけでも幸いではないかと諦めて、箸一本、茶碗一つない生活から立ち上ってきたのです。国からは唯、被災者証明書という紙きれ一枚が渡されただけでした。

八月は鎮魂の月です。下手な俳句づくりにも戦争体験を読みこもうとしています。短歌と違って何故か俳句は戦争をタブー視しているようですが、私はこの戦争への憤りと悲しみをこめてそれを作りつづけています。

・輸送船幾隻還る夏の海
・白き米櫃に満たして敗戦忌
・君征きて還らぬ岬鷹渡る

慶子

田辺の模擬原爆証言集
発行日　平成十四年七月二六日第２版
発行者　７・２６田辺模擬原爆追悼実行委員会
編　集　北田辺の歴史とまちづくりを考える会